東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.47

特集　戦後80年・地域とあゆむ博物館

八王子空襲の焼け跡

（斉藤五郎氏撮影、八王子市郷土資料館所蔵）

2026.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目　次

【特集】戦後 80 年・地域とあゆむ博物館

ミュージアム多摩 No.47 の特集テーマについて …… 2

●戦時中の東村山を伝える展示について　東村山ふるさと歴史館 …… 3

●遺物・遺構から考える戦争展示への取り組み　府中市郷土の森博物館 …… 4

●2025 年度の活動について　町田市民文学館ことばらんど …… 5

●大下元市長執務日誌の寄贈～民権と人権を再考する機会に～　町田市立自由民権資料館 …… 6

●青梅市郷土博物館で収蔵している戦争関連資料と開館 50 年のあゆみ　青梅市郷土博物館 …… 7

●戦後 80 年の取組と写真資料のデジタル化　調布市郷土博物館 …… 8

●瑞穂町郷土資料館と戦争関係事業　瑞穂町郷土資料館（けやき館） …… 9

●地域とあゆむ奥多摩水と緑のふれあい館　奥多摩水と緑のふれあい館 …… 10

●企画展示「戦争が終わって 80 年　平和のための戦争資料展―兵士の手紙と記念盃に込められた思い―」を開催して
福生市郷土資料室 …… 11

●戦争資料の再調査とその継続　武蔵村山市立歴史民俗資料館 …… 12

●戦後 80 年、埋もれていく資料をすくい上げる　あきる野市五日市郷土館 …… 13

●後世に伝える羽村の戦争の記憶　羽村市郷土博物館 …… 14

●戦後から博物館ができるまで・近況報告　清瀬市郷土博物館 …… 15

●立川の戦後 80 年―市民がつないだ戦争の記憶―　立川市歴史民俗資料館 …… 16

●青い目の人形と木造五大明王　檜原村郷土資料館 …… 17

●明日に伝える戦争体験　戦後 80 年～平和をつなぐ　日野市郷土資料館 …… 18

●開館 20 年を迎えて　日野市立新選組のふるさと歴史館 …… 19

●昭和の小金井と出土した戦争遺物　小金井市文化財センター …… 20

●くにたちの考古学者甲野勇と大湯環状列石　戦後初の大規模発掘調査　くにたち郷土文化館 …… 21

●旧日立航空機株式会社　変電所　東大和市立郷土博物館 …… 22

●「戦争と多摩の人々」展における市民協働　パルテノン多摩ミュージアム …… 23

●戦後蚕糸業の技術と教育をつなぐ――女子蚕糸業教育展と地域連携の実践から
東京農工大学科学博物館 …… 24

●小金井公園と江戸東京たてもの園のあゆみ　江戸東京たてもの園 …… 25

●戦後 80 年とたましん美術館企画展　たましん歴史・美術館 …… 26

●地域と東京都立埋蔵文化財調査センター　東京都立埋蔵文化財調査センター …… 27

●多摩六都科学館から見た戦後 80 年　多摩六都科学館 …… 28

●ギャラリー展「戦後 80 年―戦争とハンセン病」を開催　国立ハンセン病資料館 …… 29

●プラネタリウムの魅力と活用　コニカミノルタ サイエンスドーム（八王子市こども科学館） …… 30

●まちの記録と記憶を伝える　八王子市郷土資料館 …… 31

●東京都立大学オープンキャンパスで実施したミニ展示企画　東京都立大学 91 年館 …… 32

●むいから民家園の近況報告　狛江市立古民家園（むいから民家園） …… 33

●戦争関係資料の活用の現在～武蔵野市の取り組みから～　武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 …… 34

●戦後 80 年・開館 10 年の節目を地域とあゆむ大学博物館　帝京大学総合博物館 …… 35

●「明日の大学」の使命と大学博物館　国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 …… 36

●日本獣医生命科学大学の成り立ちと戦争　日本獣医生命科学大学付属博物館 …… 37

●小平市鈴木遺跡資料館と戦後 80 年　小平市鈴木遺跡資料館 …… 38

●空襲から記録をまもり、継承する―東京府・東京市文書―　東京都公文書館 …… 39

●中央大学創立 140 周年と戦後 80 年　中央大学大学史資料館 …… 40

東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿 …… 41

ミュージアム多摩 No. 47 の特集テーマについて

今年度は戦後 80 年という節目の年であり、新聞やテレビ等のマスコミで多く特集されているところであります。博物館においても、戦後 80 年の名を冠した企画展や特別展をされたところも多くありました。実際に戦時中を体験された方はご高齢となり、戦時中の体験をもとにした講演会や座談会、オーラルヒストリーの調査等はなかなか実現できない状況となりつつあります。戦時中の「生きた記憶」を後世に残していくためには、これまでとは方法論をシフトチェンジしていかなくてはならなくなる、一つの分水嶺の年だったと言えるかもしれません。

そこで、三博協機関誌「ミュージアム多摩」第 47 号では、「戦後 80 年・地域とあゆむ博物館」と題して特集することといたしました。

三博協に所属する各館で行われた、第二次世界大戦の戦時中に関する展示や講座、見学会などのご紹介のほか、この 80 年の中で地域と博物館がどのように関わり、あゆんできたのかもテーマに含めさせていただきました。

このたびミュージアム多摩を手に取っていただいた皆様にも、広く「戦後」に目を向けていただいて、地域の歴史や町の移り変わりなどに思いをはせていただければと思います。

なお、上記テーマの他にも館の近況などを報告させていただいている記事もございます。各館の特色をいかした活動報告となっております。興味を惹かれる活動がございましたら、ぜひ一度博物館に足をお運びください。

出土した焼夷弾
小金井市文化財センター（本文20ページ）

「へーてー(兵隊)送り」
瑞穂町郷土資料館（本文9ページ）

B29 のエンジンの一部、飛龍のエンジンの一部
青梅市郷土博物館（本文7ページ）

展示風景
福生市郷土資料室（本文11ページ）

戦時中の東村山を伝える展示について

東村山ふるさと歴史館　松﨑睦彦

平和塔公園　1964(昭和 39)年撮影

江戸時代の境塚の上に平和の女神像が昭和39年に安置されました。塔の台座には市内の戦死・戦病没者三百六十四柱の名簿がはめこまれています。

はじめに

東村山市役所のほど近く、西武鉄道新宿線の府中街道の踏切横に、平和塔公園があります。平和の女神像が建てられた昭和39年には周囲に畑が多く、離れた場所からも眺めることができましたが、現在は建物に囲まれ、道行く人々もそこに女神像があることになかなか気づけません。

自分の身近なところでもかつて戦争があり、B29 が来襲したり、爆弾が落とされたり、あるいは駅へ出征の見送りに行ったり、都心部から児童が疎開に来たり、といったことがこの地域で実際にあったというのは、よくよく考えてみれば「あったのだろう」とすぐに想像はつくものの、日々の人々の生活の連続の中では時とともに遠くなっているのではないでしょうか。

そういった身近な部分での戦争について、資料を展示して広く地域の人々に知っていただくのは、郷土博物館が果たすべき使命の一つと言えるかもしれません。当館では、そういった視座に立ち、これまで４つの戦争に関する企画展を開催し、毎年夏に、ロビーでのミニ展示を行ってきました。

あの日々の記憶―東村山の空襲と学童疎開―

平和観音
平成 17(2005)年撮影

平成 19(2007)年 4 月から開催された企画展です。題名の通り、東村山市域であった空襲と、都心部から市域に来た学童疎開についての展示でした。

空襲については、アメリカの公的記録等から、主だった攻撃目標になりそうな施設がない東村山に、どこから爆撃機がやって来て、どういう目的で爆弾を落としたのかを示しました。また、秋津町の志木街道そばにある平和観音について、B29 の墜落からその被害、戦後の米軍遺族との交流や観音建立の経緯について紹介しました。学童疎開については、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）附属国民学校の萩山への学童疎開、赤坂区（現港区の一部と渋谷区の一部）の赤坂国民学校の梅岩寺と正福寺への学童疎開について、資料と共に紹介しました。特に東京女子高等師範学校附属国民学校のコーナーでは、疎開児童の絵日記を中心に、当時の子どもがどのように疎開暮らしをしていたのか、展示をしました。

陸軍少年通信兵学校

平成 20(2008)年 7 月から開催された企画展です。これまで、陸軍少年通信兵学校について、どこにあったのか、何か展示はしているのか、といった質問をよく寄せられていました。特にもう一つの陸軍少年通信兵学校である新潟県の村松（五泉市）には、公園内に慰霊碑があったり、営門や哨舎が残っていたりするので、同じように東村山にもそういった史跡があるのでは、と思われる方も多かったのかもしれません。残念ながら 2008 年当時で既に東村山には当時を物語る史跡等はほとんど残っていませんでした。そこで、学校があった当時の様子を、資料と関係者へのアンケート調査の結果によって紹介しました。本学校があった場所は、企画展から 2 年半後、「東京陸軍少年通信兵学校跡地」として、市の旧跡に文化財指定されました。

町の記録が語る戦時中の東村山

平成 24(2012)4 月から開催された企画展です。東村山には戦時を語る貴重な「兵事関係書類」（徴兵・動員業務に関する公文書）が残されています（大本営から焼却命令があったので、多くの市町村は戦後焼却しました）。これを含む公文書と、町長であった小池喜八の日記等から、これまで企画展で扱った空襲や学童疎開、陸軍少年通信兵学校等を含めて、戦時中の東村山の状況を、記録の面から紹介しました。

東村山地域をめぐる銃後と前線

『陸軍少年通信兵志願者教書』
より「林間に於ける送受信訓練」

平成 27(2015)年 7 月から開催された企画展です。都市部への食糧供給や疎開の受け入れと言った「銃後」、空襲や本土決戦への備え等の「前線」、この対立する視点で、東村山の戦争を概観することを試みました。

ロビーミニ展示「東村山と戦争」

ロビーでの展示の様子

平成 24(2012)年度より、毎年 8 月にロビーを利用した戦争関連展示を行っています。これまで開催した戦争関連企画展のパネル等を再利用し、再編集してコンパクトに展示をしています。

おわりに

身近なところ、意外に気がつきにくいところに戦争の痕跡があったりします。今後とも郷土の博物館として、地域の中の戦争関連の事物を広く紹介したいと考えています。平和である今だからこそ、戦争に関する展示は大切にしていきたいです。

遺物・遺構から考える戦争展示への取り組み

府中市郷土の森博物館　草山菜摘

府中市と戦争および戦争関係の発掘調査

三多摩地域には 1935 年（昭和 10）以降、軍事施設が相次いで設立された。これは京浜地域における軍需産業の飽和を背景としている。そして府中市域も例にもれず、陸軍燃料廠や日本製鋼所、調布飛行場（当時は一部が府中市域）などの軍事施設・軍需工場がつくられている。

府中市には、武蔵国府跡など古代の遺跡が広範囲に存在しており、その発掘調査が精力的に行われている。こうした発掘調査の過程で、軍需工場跡に残された防空壕や、戦時下の生活で使用されたとみられる遺物もあわせて発見されてきた。

府中近辺の戦時期の遺構として代表的なのが、掩体壕（えんたいごう）である。これはアジア・太平洋戦争末期に戦闘機を空襲から守るために造られた格納施設であり、調布飛行場周辺には 130 基ほど築かれたとされている。こうした掩体壕の多くは 1960 年代の宅地化に伴い取り壊されてしまったため、現在までその姿をとどめるものはほとんどない。しかし府中市内にある「旧陸軍調布飛行場白糸台掩体壕」（以下白糸台掩体壕）は良好に遺存しており、2007 年（平成 19）12 月からの発掘調査で、その詳細な規模や構造が明らかにされた。

遺物・遺構から考える戦争の展示

こうした動きを踏まえ当館では、2008 年（平成 20）の夏に特別展「発掘！府中の遺跡―発掘された戦争の記憶＆調査速報」を開催した。

府中市内の発掘調査によって見つかった戦時期の考古遺物には、陶器でつくられた湯たんぽや缶詰の代用品などがある。同時期には金属の民間消費が規制されたことで、多くの生活用品を金属以外の材料によって代用する必要があった。上記の遺物はこうした時代性を示す興味深い資料である。

また、子どもが使う飯茶碗も見つかっている。この茶碗には爆弾を落とす飛行機、刀や剣を持つ少年などが描かれており、戦意高揚を目指す国家の方針やその影響を、府中市域から見つかった資料からも読み取ることができる。

一方で、戦時期の遺構として、先述の白糸台掩体壕や下原・富士見町遺跡（調布市・三鷹市にまたがる遺跡）にのこる発掘された掩体壕などを紹介した。特に白糸台掩体壕については模型で再現し、飛行機がどのように格納されていたかを分かりやすく示した。

特別展における戦争遺物の展示風景

特別展で展示した白糸台掩体壕の模型

以上のように本展示は、戦争関係の遺物や遺構を中心に構成した。考古遺物は、その場で使用され、使われなくなったものである場合が多い。つまり、遺物の出土場所は、おおよその使用地点であると考えられる。そのうえで、使用地点（遺構）の性格を踏まえると、なぜその地点でその遺物が使用されたのかを考察できる。こうした点は、遺構や遺物だからこそ明らかにできることではないだろうか。

なお府中市では、1986 年（昭和 61）に出された平和都市宣言が、2026 年（令和 8）で 40 周年の節目を迎える。これにあわせ当館では、改めて遺物・遺構から考える戦争の展示を行う予定となっている。

博物館の今後のこころみ

戦後 80 年という節目に、「戦争の風化」が問題となっている。戦争の体験者が減っている現在、彼らの体験談さえ聞いたことがないという人も少なくない。そしてそれに比例して博物館の学芸員も、その親ですら戦争体験の実感を持たない世代になりつつある。今後学芸員がどのように地域の戦争体験を理解し、どのように地域の人に伝えていくかは大きな課題である。

府中市内で戦争がどのような影響を与えたかを考えるとき、考古資料のみでは、当時の人の考えや認識を全て理解することはなかなか難しい。こうした点は文献資料や聞き書き等で補うことができる。

当館では、今回紹介した展示のほかにも、別の角度から戦争を考える展示も行ってきた。今後もこうした展示の成果も踏まえつつ、様々な情報を複合的に考察していく必要がある。そうした活動を通じて、「地域博物館に残された資料から、戦時期の地域の姿をどう考えるか」を模索していきたい。

2025年度の活動について

町田市民文学館ことばらんど　神林由貴子

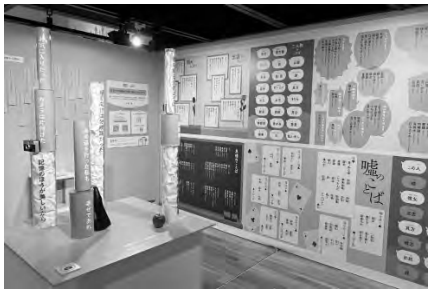
はじめに

町田市民文学館ことばらんどでは、文学やことばをテーマとした展覧会や教育普及事業実施しています。2025年度の展示事業では、春季企画展は「ことば」そのものをテーマとした『ことばのカタチ展』、夏季企画展では乳幼児向け絵本を「くだもの」というテーマでまとめた『絵本の森でフルーツ狩り展』、秋季企画展は「歌詞」に着目した『サニーデイ・サービス　曾我部恵一展』、冬季企画展は、堀辰雄の名作「風立ちぬ」を中心に本当の「しあわせ」を考える『堀辰雄　しあわせのヒント展』を企画しました。また、教育普及事業では若年層をターゲットに、YouTuber・書評家として活躍している渡辺祐真氏をプレゼンターとして迎えたトークイベント「いま、ここ。私の現在地」を実施するなど、定例事業で子どもや中高年を対象とした事業を確保しつつ、文学館に親しみの薄い 20～40 代を意識した事業を実施しています。

従来の文学館では、中高年の利用者が多いのが一般的ですが、当館ではその一世代若い層の方々にも文学に親しんでもらうために、企画内容や広報等に試行錯誤を重ねながら事業を実施しています。

展示事業

近年では、年間4回の企画展のうちの1回は若年層を対象とした展覧会を実施するようにしており、今年度は『ことばのカタチ展』を実施しました。日頃、相手の見えないSNSの「ことば」に接している若い人に、「ことば」の意味や届き方、使い方などを考えてもらうことがねらいです。谷川俊太郎や立原道造らの詩のほか、視覚的に楽しめる作品としてマンガ（鯨庭『言葉の獣』）や絵本（おーなり由子『ことばのかたち』）、図鑑（みっけ・天野慶『見て楽しむ　ことば図鑑』）、視覚と聴覚の両面から楽しめるラップ（KEN THE 390）を取り上げることで様々な角度から「ことば」に迫りました。またアプリとの連動による短歌創作コーナーの設置、展覧会のメインビジュアルをwebで活動し 20 代のフォロワーが多いデザイナーに依頼するなど、若年層に興味を持ってもらえるよう工夫しました。



左：展覧会フライヤー
右：アプリとの連動による短歌創作コーナー

来館者アンケートでは、20代・50代の来館者が21%と最も多く、続いて30代、40代という結果になり、「今の自分に刺さるような言葉と出会えてうれしかった」等の感想をいただきました。また、来館者数も目標値を上回ったことから、当初の目標は達成することができたと考えています。

教育普及事業

トークイベント「いま、ここ。私の現在地」は、若年層をターゲットにした今年度新たに取り組んだ事業です。若手書評家の渡辺祐真氏をプレゼンターに、ゲストには作家・エッセイストの小原晩氏（第1回）、小説紹介クリエイターのけんご氏（第2回）、マンガ研究者のトミヤマユキコ氏（第3回）をお迎えしました。本イベントは、後日、渡辺氏のYouTubeでの公開を前提とした企画です。また、イベントの集大成となる最終回には作詞家の児玉雨子氏をお招きします。ゲストのみなさんは、10代後半から20代に人気のある方々ばかりです。

様々な経験を経て文学に携わる活動に至った「現在地」までの道程、どんな葛藤を抱えながら活動するのか等、ゲストそれぞれの「リアルタイム」な思考に触れる機会となりました。未来の自分をイメージできない方、自分の現在地に不安を抱いている方に、気づきや共感を持ってもらうことができたのではないかと考えています。

トークイベントの様子／左から渡辺氏とけんご氏

おわりに

趣味や娯楽が多様化し、SNS で様々な情報を収集でき自宅で手軽にデジタルコンテンツを楽しめる昨今において、文学館に足を運んでもらうこと、文学やことばに興味をもってもらうことは容易なことではありません。デジタル世代においてはなおさらです。今後もデジタルを活用しつつも、リアルならではのライブ感、ここでしか味わえない付加価値を実感してもらえるような企画を考え、実施していければと思います。当館の事業が、「文学の扉」「ことばの扉」として多くの人を文学やことばの世界に誘うきっかけとなれば幸いです。

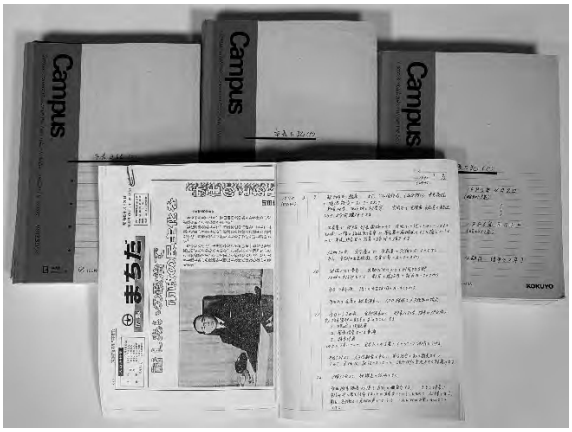
大下元市長執務日誌の寄贈～民権と人権を再考する機会に～

町田市立自由民権資料館　松崎稔

はじめに

1986 年、自由民権百年運動の熱が冷めやらぬなか、自由民権資料館が開館した。この年は二代目の町田市長大下勝正氏の５期目初年にあたる。敷地は丘陵の傾斜地で、建物はその中腹に建てられたため、門扉から入口までジグザグしながら登るスロープがある。このスロープは、自由民権運動が直面したであろう様ざまな困難をイメージしてデザインされたが、大下市政下で定めた「町田市の建築などに関する福祉環境整備要綱」に則った斜度が計算されて作られている。

大下元市長が 2023 年に亡くなられ、2024 年に市長就任期間の日記や退職後に各地で行われた講演会用メモ等が自由民権資料館に寄贈された。この機会に、大下市政期には何が社会・行政の課題だったのかを振り返りたい。



大下元市長の市長執務日記

1970 年前後の町田市政

町田市が生まれた背景には、シャウプ勧告が影響している。シャウプ勧告は、日本の民主主義確立のためには地方自治の拡充とそのための自治体の財政基盤強化が必要であるとした。そこで東京都では町村合併促進審議会に諮問し、1954 年に受け取った答申にあったのが町田市の構想だった。その後、紆余曲折を経て 58 年に町田町・鶴川村・忠生村・堺村が合併し、町田市は生まれた（町田町と南村は 54 年に合併し町田町になっている）。当時の人口は約 6 万人である。

市制施行後の市域には団地が建設され始め、1970 年前後には、鶴川団地（68 年）、境川団地・町田山崎団地（69 年）、町田木曽住宅（70 年）、藤の台団地（72 年）と大規模団地の建設ラッシュとなる。この頃の町田市の人口は、毎年２万人以上増加しており、市は、交通、下水・ごみ処理など市民生活に不可欠なインフラの整備、小中学校の建設などに追われる（町田第一小学校の児童数は 2000 人を超えた）。この状況下で町村合併を実現し、市政を軌道に乗せてきた初代市長の青山藤吉郎氏が 1970 年に引退を決め、大下勝正氏に市政のバトンが渡された。

団地の濫造と『団地白書』

団地建設に翻弄されている真っ只中にスタートした大下市政の特徴の一つに、1970 年に刊行した『団地建設と市民生活 町田市の新しい出発のために』（通称『団地白書』）がある。同書は、冒頭で国・公団・公社の住宅政策を「住民生活を擁護する自治体本来の機能を完全に喪失」させるものと批判したうえで、急激な住宅都市化による人口の異常な増加を社会問題として取り上げ、交通・教育環境・下水処理などの課題、その解決に必要な財源の不足を訴え、団地建設における市のイニシアティブ確立、国の財源補助などにより、住みよい都市建設のための問題解決案を提示した。翌年には「宅地開発指導要綱」を制定し、計画戸数 1000 戸に小学校 1 校、2000 戸に中学校 1 校、そのほか道路・公園緑地・上水道・消防署・派出所所用地等の無償提供を義務付けている。

『団地白書』

だれもが住みやすい社会に

大下市政のもう一つの特色は、福祉行政にある。その象徴的なスローガンが「車いすで歩けるまちづくり」で、1972 年に車いすのまま運行できるリフト付き車両「やまゆり号」を日本ではじめて開発した。さらに、東京パラリンピック（1964 年）の選手近藤秀夫氏を 1974 年に職員に採用。様ざまな研究検討のすえ、同年に制定されたのが先にも触れた「町田市の建築などに関する福祉環境整備要綱」である。この要綱は、日本で初めてスロープの斜度や歩道と車道の段差制限等を定めたもので、これに基づいて町田市がバリアフリーの建築確認指導を始めたのも、日本で初めてのことだった。

やまゆり号

自由民権資料館は、『わたしとわたしたち―人権と民権を考える―』という本を 2001 年に刊行した。本のタイトルには“社会のすべてのことを他人事とせずに「わたしたち」のこととすることから権利について考えよう”という想いが込められている。大下氏の日記やノート、メモなどを通して、改めて自由や権利、そして「だれもが住みやすい社会」を創造していく意義を市民とともに考える機会をつくっていきたい。

青梅市郷土博物館で収蔵している戦争関連資料と開館５０年のあゆみ

青梅市郷土博物館　小峯　勝

1　はじめに

今年は戦後 80 年という節目の年であり、新聞やテレビ等のマスコミで多く特集されていることから、当館の戦争に関する展示資料を見学したいと問い合わせがありました。そのようなこともあり、今回は当館で収蔵している資料の一部について紹介します。

今回紹介する両機は、地元の方が引き上げ保管していたものが当館に寄贈されたものです。

「B29 のエンジンの一部」（左側）
「飛龍のエンジンの一部」（右側）

2　アメリカ軍重爆撃機「B29」墜落

青梅市柚木町（当時は西多摩郡吉野村）２丁目と３丁目の境にあたる山林に、太平洋戦争末期の昭和 20(1945)年４月２日未明（青梅市史による）に、B29 が墜落炎上した場所として慰霊地があります。

この B29 は多摩地方の軍需工場を大編隊で爆撃したときに墜落したものであり、搭乗していたアメリカ軍兵士は、脱出した６人を除く５人が死亡しました。当時の村人はアメリカ軍兵士の遺体の取り扱いについて困惑していましたが、昭和 19 年３月から、この地に移住していた作家・吉川英治の「敵兵でも人間。亡くなれば丁寧に葬ってやらなくてはいけない。」との言葉で、遺体は丁寧に収容され、当地の即清寺へ埋葬されました。（現在は埋葬されていない。）

その後、平成 12(2000)年に地元のＮ氏が墜落現場近くに慰霊碑を建立し、平成 18(2006)年には日米合同慰霊祭が行われました。当日は 100 人以上の地元民、横田基地副司令官をはじめとするアメリカ軍兵士等が参集し、慰霊と日米友好と平和が願われました。

3　旧日本陸軍の重爆撃機「飛龍（ひりゅう）」墜落

B29 墜落の４か月後、終戦直前の昭和 20(1945)年８月 11 日か 12 日に「飛龍」が柚木町の山中に墜落、搭乗員 12 人全員が死亡しました。墜落場所は愛宕山尾根の東端付近、梅ノ木峠と三ツ沢峠の間の標高約 600m の北側斜面で、B29 墜落地（標高約 300m）からは南西へ直線距離で約 2.5 kmの地点です。終戦直前だったためか公表されず、一部の地元住民以外 55 年間知られていなかったため、墜落日時をはじめ明確ではありません。平成 12(2000)年頃この話を聞き現場に行ったＯ氏が墜落機の残骸を目にし、市民有志７人で平成 16(2004)年１月に 100 kg以上あるエンジンの一部（強制冷却ファン）と散在部品を谷底から引き上げ山から下ろしました。これと並行して関係者と連絡を取り、資料を取り寄せ、当時の状況を調査しました。その結果、「飛龍」は埼玉県熊谷の第１航空軍第 16 独立飛行隊に所属し、当日は静岡県浜松飛行場での事故機の支援任務を終え、傷病兵２人を乗せて熊谷に帰還する途中、墜落したと推測されています。

事故原因は不明ですが、搭乗員６人の身元は判明しています。事故直後には軍救援隊が遺体を荼毘に付し、機体の残骸のほとんどを搬出し、戦後には軍関係者が墜落現場に慰霊に訪れていたようです。

飛龍関連資料

4　おわりに

青梅市郷土博物館は、昭和 47（1972）年の建設から 50 年以上が経過し、空調や照明など館内設備の老朽化により、令和 7 年４月１日から休館しています。当館は、昭和 49（1974）年５月 11 日に開館し、令和６年度に 50 年を迎えました。休館前の最後の展示として特別展「青梅市郷土博物館開館 50 年のあゆみ」を開催し、その記念誌を作成しました。開館から 50 年にわたる特別展や企画展の歴代パンフレット・チラシや講座等の博物館活動や、以前から担ってきた文化財保存修理事業や文化財調査啓発活動等について年度別にまとめております。

『青梅市郷土博物館開館 50 年のあゆみ』記念誌

戦後 80 年の取組と写真資料のデジタル化

調布市郷土博物館　小堀　槙子

戦後 80 年　調布市郷土博物館の取組

戦後 80 年という節目の年にあたり、当館では「再びあるまじき～田邉俊三郎さんが絵にした広島での被爆体験～」（会期：令和 7 年 7 月 1 日～8 月 24 日）と「先生お元気ですか～神代村に疎開した子どもたちの手紙～」（会期：令和 7 年 9 月 2 日～11 月 24 日）の二つのギャラリー展を行いました。

疎開児童の手紙

「再びあるまじき～田邉俊三郎さんが絵にした広島での被爆体験～」では、20 歳の時に被爆した田邉俊三郎さんの描いた絵を展示しました。田邉さんは、調布市に暮らし、市内の原爆被害者の会（調友会）を立ち上げて、国内外で証言活動をする傍ら、75 歳の時から原爆の絵を描き始めました。展示作品は、田邉さんから調友会に受け継がれた原画 13 枚です。

展示にあわせて、小中学生を対象に、調友会の方から被爆体験の話を聞いたり、田邉さんへの取材経験のある方に原爆の絵を解説していただいたりするイベントを開催しました。

「先生お元気ですか～神代村に疎開した子どもたちの手紙～」では、疎開児童が出征した担任教師に宛てた手紙 345 点のうち、88 点を紹介しました。昭和 19 年、調布市合併前の神代村に赤坂区青南国民学校（現在の港区青南小学校）の児童が疎開しました。手紙には子どもたちから見た疎開生活が綴られています。

戦前の写真資料のデジタル化

令和 7 年は調布市誕生から 70 年という節目の年にもあたり、市制施行 70 周年を記念した展示や講演会を行いました。その一つが、企画展「写真でたどる調布のおもいで」（会期：令和 7 年 10 月 25 日～12 月 14 日）です。展示の趣旨は、昭和 30 年に調布町と神代村が合併し、新たに調布市となってからの調布市の歴史を写真で振り返るというもので、市民から提供された館所蔵の古写真や市の広報写真などを紹介しました。

展示資料は、市が誕生した昭和 30 年以降に限らず、昭和初期の館蔵写真のデジタル化を行い、昭和初期から 20 年代の調布の風景を映した写真を紹介するコーナーで、その成果の一部を紹介しました。今回のデジタル化作業は、アルバムに収納された紙焼き写真のほか、ガラス乾板、フィルムなど様々な形態の資料を対象としました。

なかでも市内の旧家に伝えられたガラス乾板は、資料を包んでいた封筒や紙に記載された情報から、撮影年代やタイトルを知ることはできましたが、デジタル化によって何が写っているか写真の細部まで確認することができました。

デジタル化の対象としたガラス乾板 42 点は、主に昭和初期から 10 年代に調布市内で撮影されたもので、第一小学校の前身にあたる調布尋常高等小学校の運動会（昭和 9 年）や、布田五宿の面影を残す旧甲州街道の町並み（昭和初期）など、戦前の調布の風景が映っていました。

ガラス乾板のなかには、これまでに紙焼きを元に展示などで紹介した写真の原板も含まれていました。市制施行 70 周年や戦後 80 年の展示をきっかけに、一括してデジタル化したことによって、トリミングする前の画面全景や、別のアングルで撮影されたものがあることも判明しました。写真は、昭和 14 年に市内での防空演習の様子を撮影したもので、これまでも展示で活用してきましたが、今回のデジタル化によって、原板の右端に少女二人が写っていることがわかりました。

ガラス乾板をデジタル化した写真の例
（昭和 14 年撮影　市内での防空演習）

おわりに

戦後 80 年が経過するなかで、戦争の記憶や体験を伝える資料の寄贈を受ける機会が増えてきたと感じます。失われていく資料を後世に残すためにも、権利処理のノウハウの整備や資料の所在調査など情報の集め方も課題の一つととらえ、今後どのように進めるか考えていきたいと思います。

瑞穂町郷土資料館と戦争関係事業

瑞穂町郷土資料館（けやき館）　北爪 寛之・磯部 隆之

○はじめに

当館における「戦後 80 年・地域とあゆむ博物館」としての活動は、毎年８月に開催している特別講演会「平和へのメッセージ」と、瑞穂町教育委員会が発行した刊行物『瑞穂こども歳時記』があります。以下、講演会、刊行物について紹介します。

○「平和へのメッセージ」

この特別講演会は平成 28 年に始まり、コロナ禍で中断した令和３年を除いて毎年実施し、令和７年で９回目の開催となりました。戦争の悲惨さと平和の大切さを語り継ぐため、終戦記念の８月に行われています。

開催当初の数年間は、町が公募した「平和のメッセージ」に応募した中から、入賞作品を応募者が朗読するというスタイルをとってきました。その後、令和２年の第５回から、町内在住の本橋善子氏が語り部となって、今に至っています。本橋氏は瑞穂町更生保護婦人会会長などを歴任され、現在は平和へのメッセージ専任講師や地元の小学生を対象に戦争体験の語り部を行っています。

令和７年８月に行われた第９回「平和へのメッセージ」では「戦後 80 年　あの戦争を振り返り平和を訴える」と題して、激戦地となった硫黄島を中心とした講演があり、特別出演の地元小学生が『へいわってすてきだね』（ブロンズ新社）を朗読しました。参加者からは「絶対にやってはいけない戦争のためにも、こういうイベントは必要だと思う」、「改めて戦争は絶対に起してはならないと感じた」などのお声をいただきました。

（写真 1）「平和へのメッセージ」（左から３人目が本橋善子氏）

○関谷和氏と『瑞穂子ども歳時記』

昭和 8 年（1933）生まれの関谷和氏は、元狭山村（現在の東京都西多摩郡瑞穂町・埼玉県入間市）出身の方です。故郷のことばに関心を寄せ、元狭山村の言葉を収集、『子どものころ聞いたことば 話していたことば』として平成 13 年に出版します。

また、子どもの頃にあたる昭和 10～30 年代の元狭山村を思い出して描き、入間市博物館『読む絵本 思い出のなかのおらーほー』（2020 年）や瑞穂町教育委員会『瑞穂子ども歳時記-昭和 10 年～30 年代の暮らし-』として、関谷氏の絵を収め、元狭山村のくらしを紹介しています。これらの絵やくらしは、戦地に赴いた記録とは異なる、銃後の村の暮らしぶりの記録でもあります。

例えば、「落下傘部隊の訓練」は、狭山飛行場での一幕です。狭山飛行場は昭和９年にできると、陸軍航空士官学校の練習飛行場となり、九三式中間練習機（赤とんぼ）が練習していたそうです。関谷氏が小学３年生の頃、「落下傘部隊の訓練が飛行場である」という噂が広まり、見に行った光景を描いたものです。２機の輸送機から 50 人近くの隊員が着地し、機関銃の組み立て、相手陣地への匍匐前進などを行っていました。

（写真 2）「落下傘部隊の訓練」

この他、出征する兵士を見送る「へーてー（兵隊）送り」では、「武運長久」などののぼり旗を先頭に、小学生も日の丸の小旗を持ち箱根ヶ崎駅まで送りました。皆、国のために頑張って戦うようにと励ますが、心の底では全員が無事で帰ってきてほしいと願ったそうです。これらは村の戦争の記憶といえます。

（写真 3）「へーてー（兵隊）送り」

○おわりに

戦後 80 年という一つの節目を迎えた今、講演会の開催や刊行物を活用しながらメッセージを発信していくことが、地域と共に平和を希求することにつながります。

地域とあゆむ奥多摩水と緑のふれあい館

奥多摩水と緑のふれあい館　川崎　渚

はじめに

当館は、東京近代水道 100 周年と小河内ダム竣工 40 周年の記念事業として、東京都水道局と奥多摩町の共同で平成 10 年に開館しました。

当町の歴史を顧みる上で避けては通れないのが、小河内ダムの建設です。小河内ダム建設のため、小河内村の大半は水没することから、住民は村内外への移転を余儀なくされました。一方で、小河内村の歴史や文化を残し、後世へと伝えるべく調査・保存活動がありました。収集した資料の活用・保存のための施設として開館したのが、当館の前身となる奥多摩郷土資料館です。

ここでは、当館の戦前～戦後のあゆみをご紹介します。

賑わう奥多摩郷土資料館

小河内ダム建設と文化財収集

給水量増強のため、昭和７年東京市議会において「東京市第二水道拡張事業計画」が可決され、多摩川水系を水源とした大規模ダムを建設する計画が立てられました。ここで主たる水源として想定されたのが「小河内ダム」です。小河内ダム建設は村民の苦渋の決断でしたが、昭和 13 年の工事着工に至るまで６年が経過していました。昭和 18 年に第２次世界大戦の拡大に伴い工事中止、昭和 23 年に再開され、昭和 32 年にようやく小河内ダムは完成しました。昭和 7 年の決定から昭和 32 年の完成に至るまで、25 年もの歳月を経たのです。

また、小河内ダム建設中の昭和 29・30 年、水没対象地域において東京都教育委員会による小河内文化財総合調査が実施されました。歴史・民俗・自然等、総合的に調査され、それと共に山村生活用具 347 点が村民の協力を得て収集されます。その後、昭和 39 年に湖底に沈んだ旧小河内村の山村生活を表す貴重な生活用具（「小河内の山村生活用具」）として、国の重要有形民俗文化財に指定されました。

奥多摩郷土資料館の開館

資料収集後の課題となるのが保存場所の確保です。当町には資料館や収蔵施設がなく、地域住民の協力を得て保管されていたため資料館の建設が切望されました。昭和 53 年、調査時からの念願であった小河内や奥多摩の歴史や文化等を広く周知し文化財を後世に残すため、奥多摩郷土資料館が開館しました。

展示内容は、小河内の山村生活用具を中心として、町域全体の歴史や生活・年中行事、郷土芸能等で構成され、レストランや売店も併設しました。収蔵スペースが限られたことから、展示しながら収蔵する「収納展示」という方法がとられ、屋外には水没地域から移設した石碑・石仏群 40 点余りを展示しています（現在も展示中）。

奥多摩郷土資料館見学のしおり

郷土資料館から水と緑のふれあい館へ

町民や都民、多くの人に親しまれていた郷土資料館でしたが平成８年に閉館し、平成10年に奥多摩水と緑のふれあい館として新たに開館しました。

当館は、郷土資料館から引き続き当町の郷土史「水のふるさと」と、緑のダムの秘密「水が生まれる」・水道水源林の四季と小河内ダム 360 度シアター「水が集まる」・奥多摩 3D シアター「水が輝く」・水源林の世界を体験「緑をまもる」の各展示室で水道に関する展示をしています。

昨年３月には、「水が集まる」と「緑をまもる」の２つの展示室がリニューアルオープンしました。

リニューアルした展示室（上)「水が集まる」（下)「緑をまもる」

おわりに

当館には小河内ダムサイト周辺という立地的好条件もあり、年間 18 万人という多くの方が来館されます。

現在、小河内の山村生活用具は、資料保存の観点から常設展示をしていません。今後は文化財ウィークや企画展等、開館のきっかけとなった小河内村や奥多摩町に係わる歴史や文化をみなさまに広く周知し、普及していきたいです。

企画展示「戦争が終わって80年　平和のための戦争資料展 ―兵士の手紙と記念盃に込められた思い―」を開催して

福生市郷土資料室　愛甲晴美

はじめに

福生市郷土資料室では、平成８年度より毎年終戦の日に合わせて「平和のための戦争資料展」を開催しています。展示を通して市民に戦争や平和について考えてもらう機会を提供するという趣旨のもと、毎年テーマを変えて開催を続けています。令和４・５年の建物改修工事による閉館期間も、仮事務所を置いた旧ヤマジュウ田村家住宅の土蔵ギャラリーにおいて、小規模ながら展示を行いました。住宅主屋の一室では灯火管制の再現展示を試み、再現展示はその後も毎年継続しています。また、市役所情報スペースにおいても関連の出張展示を行っています。

今年度の企画展示について

これまで当館では、主に福生の人々に関連する戦争資料の展示を行ってきました。戦後80年の節目の年である今年度は、一つの試みとして福生市文化財保護審議会委員の新井勝紘氏のコレクションを中心に、「軍事郵便」と「記念盃」の持つ資料的価値に焦点を当てた企画展示「戦争が終わって80年　平和のための戦争資料展―兵士の手紙と記念盃に込められた思い―」を開催しました。

軍事郵便は、軍事機密の保護を目的とした検閲のために戦争の実態を反映していないとの指摘もありますが、戦地の兵士と内地の人たちを結ぶ唯一のコミュニケーション手段であり、当時を生きた人々の思いが込められた貴重な資料です。

軍事郵便に関する展示では、太平洋戦争期のものを中心として、①さまざまな軍事郵便のかたち、②軍事郵便の喧伝活動、③軍事郵便の文例集、④シベリア抑留者の俘虜郵便葉書、⑤戦後に出された軍事郵便の翻刻出版物を取り上げました。

①では、戦地からの墨塗り葉書、細かい文字で記したもの、子どもに向けてカタカナで書かれたもの、何枚もの葉書を使って連続する手紙のように同じ宛先に書き送ったもの、様々な種類の絵はがき、封書などを紹介しました。また、内地から戦地の兵士に出された軍事郵便の綴りなども展示しました。これは戦地から復員の際には私物を処分せざるを得ないことが多かったため、戦地から出されたものに比べて残存数が極めて少ないとされています。

②は軍事郵便が戦地の兵士の士気を高めることから、国が軍事郵便を奨励し宣伝したポスターを展示しました。その他にも雑誌、歌の楽譜のほか、各地の郵便局が作成した軍事郵便の正しい出し方を記したチラシ・パンフレットなども紹介しました。

③の文例集は、軍事郵便を書くためのいわゆるハウツー本ですが、女性が出す場合の書き方など様々な需要があったことがわかる資料を紹介しました。

④の俘虜郵便葉書は、終戦後のシベリア抑留者にとって安否を知らせる唯一の方法で、捕虜の生活やロシアの情報に関する記述に厳しい検閲があり、書ける内容には制限がありました。

⑤は戦後に軍事郵便を保存している親族や団体などから出版された翻刻の刊行物を取り上げました。特に近年刊行される例も多く、活字を通して当時の人々の思いを知ることができる資料として紹介しました。

また、福生関連の資料として、軍事郵便のほか、役場から出された出征祈願祭や見送り、凱旋者や英霊の出迎えの通知のほか、地域の人々から出征者への餞別、寄せ書き、慰問袋など出征兵士と地域の密接な関わりを示す資料を展示しました。

次に取り上げた記念盃は、出征した兵士が兵役を終えて帰郷した際などに、親戚やお世話になった人たちへ記念品として配ったものです。そこには、生きて帰ることができた祝意が込められています。日清戦争期からはじまり、戦況が悪化した太平洋戦争末期には次第に作られなくなりました。盃には、兵士の名前や所属部隊、除隊記念・満期記念といった文字や日章旗、旭日旗、所属部隊を象徴する絵柄など様々なデザインが見られます。今回は日清戦争期から太平洋戦争期のもの66点と、同様に記念品として作られた徳利、盆、茶托を展示しました。

展示期間中には新井勝紘氏による記念講演会「今改めて軍事郵便を読む―“いのちの便り”の重さ―」を開催し、軍事郵便についてより深く知る機会となりました。また、展示担当者による展示解説会も行いました。

戦争資料展の課題と今後の展望

これまでの戦争資料展で常に課題となっているのは、幅広い世代に戦争資料に関心を持ってもらうことの難しさです。今回は、軍事郵便の翻字を出したことで、読む機会があってよかったという意見があった一方、子どもへの配慮不足は否めませんでした。当館では、企画展示ごとに小学生向けのワークシートを作成しています。そこで、子どもたちにも読めるものということで、カタカナで書かれた葉書を読んで、感じたことを自由に書いてもらうことにしました。しかし、カタカナでも当時の言葉が理解できなかったり、手紙の内容から何かを感じとることが難しいといった感想もあり、今後に向けての反省点となりました。他方、記念盃はそのものが持つインパクトが強く、年齢を問わず、多くの来館者がその多様で多彩なデザインに驚き、興味を示してくださったことは、今回の収穫の一つでした。

戦後80年を迎え、戦争を体験した世代の方々から直接お話を聞くことも難しくなっています。だからこそ、戦争の記憶を風化させないよう、幅広い世代に関心を持ってもらえるような切り口で戦争資料展を継続していく必要性を改めて感じています。

戦争資料の再調査とその継続

武蔵村山市立歴史民俗資料館　高田春香

はじめに

武蔵村山市では、平成 19（2007）年、太平洋戦争（アジア・太平洋戦争）時に市内大南地区へ設置された「東京陸軍航空学校（東京陸軍少年飛行兵学校）」の跡地を「市内に軍事施設が存在したことを後世に伝え、世界恒久平和を祈るため」に市文化財「旧跡」として指定しました。

そして郷土の文化遺産を保存し、展示活用していくことを目的に、平成 28（2016）年 9 月 25 日に武蔵村山市立歴史民俗資料館分館が開館、この施設では武蔵村山市の戦争資料について紹介しています。

史料の喪失や戦争の惨禍を伝える「語り部」の減少、それにより記憶の風化が問題視されている昨今、改めて分館開館から 10 年を迎え、さらに戦後 80 年となる節目を前に市内の戦時下の記録を掘り起こし、後世へ伝えるため、記録冊子の刊行と分館常設展示パネルのリニューアルを行いました。

武蔵村山市立歴史民俗資料館分館　外観

記録の掘り起こし

再調査にあたり、改めて当館が過去に行っていた戦争当時の聞き取り調査の記録をはじめ、市内に残る公文書類や都・国の公文書、市内軍事施設関係者が執筆した書籍等の見直しを行いました。

聞き取り調査の記録では、対象者がすでに故人であることから一次情報源として生の証言が得られないため、その補完調査として親族や地域住民への聞き取り・公文書の照合等を行いました。それにより戦後の証言ではあるものの、文書記録のみで詳細が分からなかった空襲被害も明らかになってきました。

これは昭和 20（1945）年 7 月 6 日の村山国民学校への空襲（機銃掃射）の記録で、今まで『東京大空襲・戦災誌』（1975）に記載があったものの、学校文書（日誌）では「空襲被害なし」とあり、詳しい被害状況について市史編さん調査資料にもない状況でした。

また国立・東京都公文書館等のデジタルアーカイブやデータベースの普及により、特定情報の検索が容易になったことから、平成 28 年以降も続々と新しい発見がありました。

そのひとつに市史編さん時の調査で、東京陸軍航空学校の土地がもとは立川飛行第五連隊の「射爆場」として買収されたと報告されていましたが、買収時期等に関する文書の発見により「立川小爆撃場」という名称であったことが分かりました。

こうした新しい発見をもとに記録をまとめ、今回常設展示パネルのリニューアルまで実現できたものの、いまだに埋もれている戦争資料等はあり、調査を継続する必要があります。

これらの調査を遂行するにあたり、長年にわたる市内の戦争調査研究を続けている当市文化財保護審議会委員の楢崎由美氏の御尽力がなければ形にはなりませんでした。

分館常設展示室　風景

おわりに

再調査を行ったことでより痛感したことは、対象者への聞き取りに期限があるということです。戦時下に国民学校へ通っていた子どもたちも今では 80～90 歳であること、今回は地域社会の繋がりにより情報が得られたものの、市史編さん調査時から約 20 年後に行った再調査であること、これからは記録とその伝承がより難しい状況です。

とくに過去に実施した聞き取り調査資料は、対象者の同意を求めていなかったことから、語り部としての動画化（データの二次利用）ができないという難点であり、調査当時は戦争記録に対して重視されていなかったことが悔やまれます。

戦争のない平和を願うには戦争を知ること、その機会を残すことが大切で、過去の記録を風化させないためには資料をもとに情報発信する必要があります。記録だけでは補えないものを含む当事者たちの証言を少しでも多く残していくことが必須であり、調査の継続・継承が課題となっています。

戦後80年、埋もれていく資料をすくい上げる

あきる野市五日市郷土館　小澤雅也

はじめに

今年（昭和１００年）は終戦から８０年の年です。終戦の年に生まれた赤ちゃんが今では８０歳になるほどの時間が流れました。しかし世界では今も戦争が起こり、様々な報道を通して私たちも見聞きすることがあります。それらは平和な日本に暮らす私たちには現実とは思えないようなものが多いです。日本にも戦争があったということが風化しつつある平和な時代に生きる私たちに向けて、戦後８０年という節目の年に、戦前戦後の記録と出土品による企画展を行いました。

企画展の様子1

企画展について

展示概要については、以下のとおりです。

○タイトル「戦後８０年　未来永劫に平和を！－市内に残された戦争の記録・出土品から－」

○展示期間　令和７年６月６日（金）～７月１３日（日）

○展示構成　※［　］内は主な展示物

１「戸倉国民学校の答辞・送辞」

卒業式で読み上げられた答辞・送辞から当時の社会状況を垣間見る。［昭和１５、１６、２１、２５年の小学校の答辞・送辞及び卒業写真］

２「出土品から見る戦争」

市内出土の資料や記録から市内にあった軍の施設の位置を考える。［高射砲尖鋭弾（雨間地区遺跡）、アメリカ製の瓶、銃剣出土状況写真等（水草木遺跡）］

３「市内の空爆・銃撃」

戦争体験者の記録から市内にあった空爆・銃撃地点を紹介。

４「疎開児童・勤労奉仕」

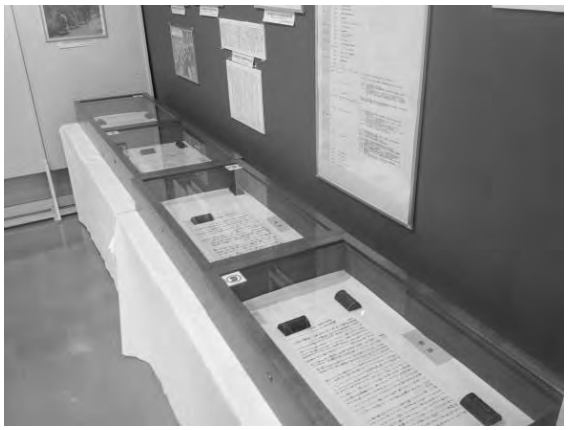
戦争体験者の記録から疎開児童や勤労奉仕、当時の食事などを紹介。

５「戦後の処理」

戦後の不発弾撤去を紹介。

展示資料のすくい上げ

１の答辞・送辞については、閉校した市内の戸倉小学校から収集した学校資料を再整理していた際に、戦争に関係する資料であることが分かり、今回の企画展に繋がったものです。資料目録上では名称が「答辞」「送辞」となっていたため単なる学校資料と認識されていましたが、戦前戦後という時代を軸に資料を比較したところ、それらの内容に変化が見られ戦争の影響が子どもたちに及ぶ様子が分かる資料になりました。



企画展の様子2（答辞・送辞）

また、出土資料については市内の埋蔵文化財の発掘調査の中で発見され、保存していたものでしたが、今回の展示準備の中でそれらの出土資料と地域に残されていた戦争の記録などを合わせてみることで、軍事施設があったであろう場所の地図を作ることができました。企画展を作る中で、収蔵していた資料を繋ぎ合わせ、新しい意味や解釈、収蔵資料的価値を見出していく。企画展を実施すること自体が、資料調査となり記録作成に繋がることを改めて感じました。

企画展の様子3（出土品など）

おわりに

今回の企画展を通して、すでに収蔵している資料を横断的に再調査することで、戦争に関係する資料としての意味を見出すことに繋がりました。戦争を経験した方々の体験談や口承を保存することが困難になってきつつある昨今、すでに収蔵している資料を改めて調査することで資料的価値を付加していくということも、戦争を後世に伝えていく重要な方法の一つかもしれません。

なお、今回の企画展は当館調査研究員（関根）の調査研究によるものであることを付記しておきます。

後世に伝える羽村の戦争の記憶

羽村市郷土博物館　前田夏実

はじめに

羽村市郷土博物館では、毎年８月に平和啓発を目的とした企画展「平和の企画展」及び３月に東京大空襲に関する企画展「東京の空襲資料展」を開催しています。これら事業は、羽村市が掲げる「羽村市生涯学習基本計画」において、推進施策として示されている各ライフステージの「郷土学習の充実」の具体的事業に位置付けられます。戦争を経験した世代の減少に伴い、若い世代へ戦争がどういうものか伝える機会も減りつつあるため、当館事業をもって戦争の悲惨さと平和の重要性を学ぶ機会としています。

本稿では、近年に行ったこの２つの事業の紹介と、より広い世代に展示を見ていただくための取り組みを紹介します。

平和の企画展

「平和の企画展」は、戦争（主に第二次世界大戦）に関するテーマを設定し、それに関する資料を展示する事業です。戦争に関するテーマと羽村を結び付け、様々な観点から羽村の歴史を学べるよう構成しています。近年のテーマは「兵士の出征・戦地での暮らし」(R3)、「戦争末期～終戦にかけての空襲被害について」(R4)、「終戦後の配給と闇市について」(R5)、「兵役と終戦後の復員について」(R6)、「制限された生活」(R7) でした。このうち、令和３年度のテーマは後述の東京の空襲資料展と重複しますが、令和４年度と５年度に予定していた終戦後をテーマとする展示のため、終戦間際に関する展示として行いました。当時はロシアによるウクライナへの侵攻が始まった頃であり、連日報道される空襲被害が遠い場所の話ではなく、かつて日本でも日常と隣り合わせだったことを伝える目的がありました。翌年以降に２回に分けて終戦後について取り上げ、戦争が終わってもすぐに平和な生活が戻るわけではなく、戦争の影響が長期間にわたることを伝える展示としました。

東京の空襲資料展

「東京の空襲資料展」は、羽村の空襲にまつわる資料から羽村における空襲とはどのようなものであったか、またその影響についてなどを知ることができるよう構成しています。年度ごとに、日誌などの記録に関する資料や空襲時に使った物の資料などのテーマを設けて展示をしています。

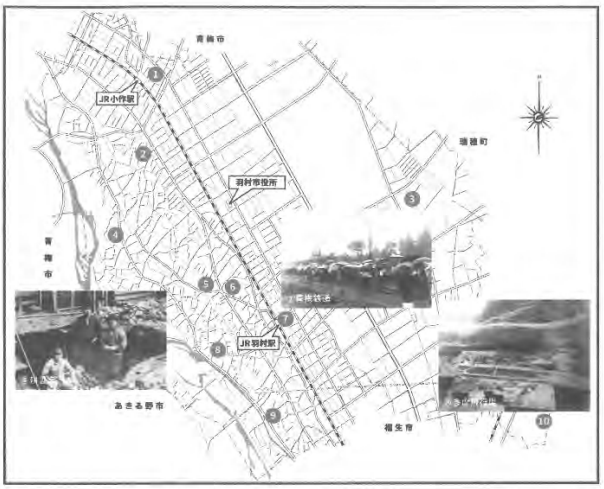
空襲は羽村にとっても身近な戦争の記憶であり、戦争末期になると連日のように空襲警報が発令されていました。軍需工場を狙った機銃掃射により亡くなられた方もいます。昭和 20 年３月 10 日の東京大空襲こそ免れていますが、羽村でも空襲があり被害が生じたという事実を明示し、戦争による悲劇が身近な場所で起きていたという実感的な理解を促す展示とすることで、恒久的な平和思想を広く伝えています。

羽村市内の戦争の記憶

第二次世界大戦時の羽村（当時は西多摩村）は農村であり、都市部などからの疎開者を受け入れていた地域でした。爆撃による被害こそなかったものの、空襲警報に怯える生活や駅で出征兵士をその家族が送り出す光景は変わらずありました。

また、村内には製糸工場から軍需工場となった西玉社（現羽村市立羽村西小学校）や半地下式飛行機工場、高射砲陣地（現羽村市動物公園）があったため、羽村は農村ながら戦争に関する場所は多くあります。

これらの情報を視覚的に分かりやすくするために、令和６年度の展示では、地図と解説をセットにした自立式ロールバナーを作成しました。



番号	スポット名	解　説
❶	小作の変電所	1945 年（昭和 20 年）に行われたアメリカ軍の戦闘機による機銃掃射で変電所に火災が発生したという記録が残っています。
❷	半地下式飛行機工場跡	現在のグリーントリム公園付近には、1945 年（昭和 20 年）に昭和飛行機小作分工場が造られました。この工場は地面を掘り下げた中に造られ、掘った土で周りを囲んでいたため、建物はほとんど見えませんでした。この工場では「零戦」や「隼」などの戦闘機が造られていました。
❸	高射砲陣地	高射砲は、地上から空中の飛行機を射撃する兵器です。第二次世界大戦終戦後、現在の羽村動物公園付近にアメリカ軍によって高射砲の陣地が設置されましたが、実戦で使用されることはありませんでした。
❹	西玉社跡	現在羽村西小学校がある場所には、かつて西玉社という製糸工場がありました。1943 年（昭和 18 年）に西玉社は軍需工場（小穴製作所）となりました。1945 年（昭和 20 年）には、この工場を狙ったアメリカ軍の戦闘機による機銃掃射で１名が亡くなりました。
❺	護国神社	1906 年（明治 39 年）に、日清戦争及び日露戦争に西多摩村（現羽村市）から出征し、戦没者となられた方を祭祀する招魂社として建立されました。境内には戦役記念碑が建っています。
❻	耕書堂	羽村出身の文豪、中里介山が創設した私塾「西隣村塾」の一角に造られた建物です。1944 年（昭和 19 年）に中里介山自身が防空壕を掘った際の写真が残っています。
❼	青梅鉄道	青梅鉄道（現 JR 青梅線）は、奥多摩で産出する豊富な石灰石の運搬などを目的に敷設され、戦時中は出征する人々の輸送にも使われました。
❽	東会館	1944 年（昭和 19 年）に品川区立城南第二国民学校の児童 55 名が集団疎開したという記録が残っています。
❾	川崎会館	1944 年（昭和 19 年）に品川区立城南第二国民学校の児童 23 名が集団疎開したという記録が残っています。
❿	多摩飛行場	現在横田基地がある場所には、1940 年（昭和 15 年）に立川陸軍飛行場に付属する飛行場として多摩飛行場が建設されました。陸軍航空審査部や陸軍航空発動機試験場などの施設も設置されていました。

自立式ロールバナー「羽村市内の戦争の記憶」

おわりに

戦争を直接経験した方が少なくなるなか、いかに戦争の記憶を若い世代に継承していくかということが今後の課題となっています。縁遠い事柄に関心を持ってもらう工夫として、前述のロールバナーは一定の効果が得られたと考えています。

今後も、様々な視点で戦時下の羽村、空襲時の羽村がどのようなものであったかを示し、平和の重要性や尊さを伝えていきます。

戦後から博物館ができるまで・近況報告

清瀬市郷土博物館　石井　美花

はじめに―戦後から清瀬市郷土博物館開館まで―

昭和20年の終戦時、清瀬はまだ村でしたが、戦争の引き揚げ者の受入や、昭和30年代後半からの団地の建設により、人口が増えていきました。昭和29年には清瀬町に、昭和45年には清瀬市になりました。

清瀬の人口が増える事で、古くから清瀬に住んでいた人たちの所に新しい価値観を持った人たちが移り住みました。清瀬の歴史や文化を新しく来た人たちに伝え、市民同士の交流の場を目的として、昭和60年に清瀬市郷土博物館が建設されました。

清瀬市郷土博物館の位置（●が博物館　■が清瀬駅）

清瀬市郷土博物館の位置は、交通の便利な駅の近くではなく、古くから住んでいる人たちと新しく移り住んできた人たちを結びつける意味を込めて、清瀬市の中間地点にしました。

郷土の文化と歴史を伝える博物館事業

昭和60年11月に開館した清瀬市郷土博物館は、市民に親しまれる博物館を目指し、先人の知恵に学び、「見て・触れて・体験」できる博物館事業を行っています。

清瀬で古くから行われている年中行事を体験する事業として、「小正月のまゆだま飾り」、「節分の豆まきとやっかがし」を行っています。また、郷土文化に触れる機会として、「うどんづくり講習会」、「染め物教室」、「しめ縄づくり講習会」を行っています。

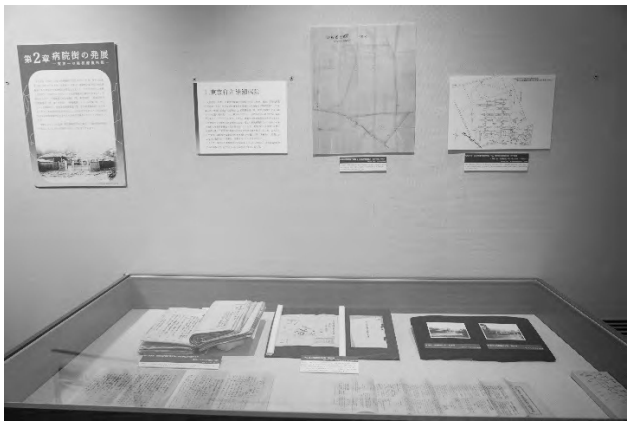
令和7年度「うどんづくり講習会」の様子

年５回の歴史講座では当館学芸員が講師をつとめ、中里地域で江戸時代から続いている富士講の活動と火の花祭について紹介するなど、清瀬の歴史や文化についてより深く学べるよう、テーマを決め、発表しています。

令和7年度の近況報告

今年度のテーマ展示は「清瀬の稲荷講―江戸から続く農家の祭―」、「今から行こう！南口商店街」、「市制55周年記念　進化するキヨセ図鑑」を行いました。「清瀬の稲荷講―江戸から続く農家の祭―」では、稲荷信仰に関わる古文書や、稲荷講で実際に使用された膳や椀から、現在も市内でみることが出来る稲荷講や稲荷信仰を紹介しました。博物館実習生による展示、「今から行こう！南口商店街」では、市内に複数ある商店会のうち、清瀬駅の南側にある３つの商店会の歴史や活動内容を紹介しました。「市制施行55周年記念　進化するキヨセ図鑑」では、写真や当時の生活用品から、農村から住宅都市への変化を紹介しました。また、「博物館友の会」発足40周年を記念したミニ展示も行いました。３月からは「清瀬の中世～甦れ板碑たち～」として、清瀬で数多く出土している板碑を展示します。

特別展では、11 月に「清瀬と結核～結核療養の歴史と現在、そして未来～」（会期：11月１日～12月７日）を開催し、昭和初期から続く清瀬と結核との関わりの歴史と、清瀬から発信される国際貢献について紹介しました。２月には清瀬の新たなランドマークとなる豪華寝台客車「夢空間」が設置されるのに伴い、日本の食堂車・寝台車の歴史を紹介する展示「寝台列車今昔物語～夢空間が清瀬へ、その軌跡～」（会期：２月１日～３月15日）を行います。



特別展「清瀬と結核～結核療養の歴史と現在、そして未来～」展示風景

おわりに

「市民に親しまれる博物館」を目指して開館した当館は、今年で 40 周年を迎えました。令和５年には経営政策部シティプロモーション課へ組織改正し、清瀬市の魅力を市内外へ発信する役割も担っています。

引き続き、市民が「見て・触れて・体験」できる博物館事業を続け、清瀬市の歴史、文化を後世へ伝え、市内外へ魅力を発信していくよう、取り組んでいきます。

立川の戦後 80 年―市民がつないだ戦争の記憶―

立川市歴史民俗資料館　漆畑 真紀子

はじめに

立川は、大正 11（1922）年に陸軍飛行場が開設し、陸軍第五大隊が岐阜県各務ヶ原市より移駐したことを契機に、陸軍関係施設や軍需工場・軍関係の民間会社などが立ち並ぶ軍事都市となりました。大正 12（1923）年の関東大震災で、罹災した民間航空会社などが立川飛行場へ移転したことで一時「空の都」と称され、著名人や世界的な飛行家が訪れることもありましたが、昭和 6（1931）年に羽田飛行場が完成すると徐々に民間航空会社が移転し、その後、立川は戦時体制の強化とともに軍都としての色を濃くしていきました。そのため幾度も米軍による空襲に遭い、多くの戦禍に見舞われ、一般市民にも多くの犠牲者が出た街といえます。

今年度、戦後 80 年という節目の年を迎え、過去の歴史を学び、再びこのような恐ろしく悲しい出来事を繰り返さないために、立川市内各所で企画展や講演会などが行われました。そのなかでの当館の活動をお伝えします。

平和・人権学習事業 出張企画展「立川から考える戦争と平和」

当館は立川市教育委員会生涯学習推進センター文化財係が管理・運営しています。同課である社会教育施設（「学習館」と呼称）では平和・人権学習事業で立川市民の戦争体験や被害を知る講座やパネル展示、市内公立中学校生徒を原爆投下地の広島へ派遣する平和学習派遣事業を例年継続して行っています。今年度は戦後 80 年ということもあり、当館も協力して、市内各所にある学習館での講演会に合わせ、出張企画展を実施しました。

〔出張企画展開催日程〕

・立川市役所：令和 7 年 7 月 7 日（月）～12 日（土）
・西砂学習館：令和 7 年 10 月 7 日（火）～11 日（土）
・幸学習館：令和 7 年 11 月 4 日（火）～8 日（土）
・アイムギャラリー：令和 7 年 12 月 15 日（月）～20 日（土）

令和 7 年 7 月 7 日～12 日　立川市役所庁舎での出張企画展

当館が協力する強みとして、実物資料を扱える点にあります。せっかくならば市民に実物資料を間近に目にしていただこうということで事業を計画し、それにあたり、特に市役所庁舎には十分な展示設備やケースがないため、展示台としてエタノール消毒した長机を利用し、会場には担当職員を配置、来場者に対して飲食物の持ち込みや資料に触れないよう注意喚起し、会場内を見回ることで実物展示を実現しました。さらに、展示の時間を制限し、展示時間を終えると担当職員が施錠できる部屋に資料を撤収、翌日また設営するという労力をかけ慎重に行いました。展示する資料も民具資料（衣料品、携行品）にとどめ、展示作業で傷みやすい紙媒体の資料は複製物を作製し展示しました。展示を観覧されて、展示資料の鉄カブトを前に感慨にふけるご高齢の女性や、投下ビラ（伝単）の文面に読み入る若い方など、想うところがあるような方も多く見受けられました。

ミニ企画展「立川の戦後 80 年―市民がつないだ戦争の記憶―」

当館ラウンジでは 7 月 23 日（水）から 9 月 15 日（月）までミニ企画展を開催しました。

展示資料には前述の出張企画展での出展資料に加え、戦時下の人々の暮らしにも目を向けてほしいと考え、生々しい記述がある市民が綴った当用日記や米軍に投下された爆弾の破片、米国国立公文書館原蔵の米国戦略爆撃調査団文書のほか、立川市役所の戦時体制下の公文書なども展示・紹介しました。

期せずして『東京新聞』特集記事「つなぐ 2025 年 戦後 80 年」（8 月 16 日付）に掲載していただき、多くの反響を得ました。特別展示室では別の企画展が開催中だったため小規模な展開となりましたが、「『東京新聞』で読みました」と、ご家族で足を運んでくださる方々もいらっしゃいました。

令和 7 年 7 月 23 日～9 月 15 日　資料館でのミニ企画展

おわりに

立川市の人口（住民基本台帳登録）をみると、令和 7 年 11 月 1 日時点で戦前生まれ 80 歳以上の人口が、総人口の約 11%しかおらず、さらに戦争の記憶を語れる世代はその半分に絞られます。年々世代交代が進み、戦時中の資料をご寄贈いただく機会も、さらにその資料にまつわるお話を当事者に直接聞く機会もとても少なくなってきました。

当館所蔵の資料はそのほとんどが市民の方々から寄贈されたものです。戦争関連の資料にしても、代々の市民が守り世代を繋いできた大切な記録・記憶です。それらを活用して企画展や事業を行うことは市民の記憶を繋いでいくことそのものなのではないかと、事業を通して、観覧者の様子や言葉を交わすなかで改めて感じています。少ない機を逃さずに丁寧に聞き取り調査をし、調査内容を記録し適切に保存、利活用に供する準備をする使命はもちろんのこと、またそれを社会に還元する場を設けられるのも地域の資料館ならではなのかもしれません。

引き続き、学びや気づきの機会をご提供できるよう事業展開していきたいと思います。

青い目の人形と木造五大明王

檜原村郷土資料館　清水達也

はじめに

檜原村郷土資料館では、戦後８０周年等のイベントは行っておりませんが、戦前から戦後まで由来のある檜原小学校から資料館へ寄贈（移動）されたパティちゃん人形や歴史探求イベントについて少しだけ書いていこうかと思います。

青い目の人形「パティちゃん」

青い目の人形とは、1972 年（昭和２年）にシドニー・ギューリック氏や渋沢栄一氏など民間の慈善団体が協力し、日米友好のためアメリカから日本の子供達へ送られた人形で、歓迎式典のあと各地の小学校へ約 12,700 体（諸説あり）が送られましたが、人々の思いもむなしく第二次世界大戦がはじまり友好の人形から敵国の人形へと変わってしまいました。

人形の中には敵国憎しと訓練の標的や焼却処分されたもの、空襲などの戦災により失われてしまったものも多く、未発見の物を除く現存しているものは全国で約 340 体（東京都内では約 12 体）とのことです。

パティちゃんはそのうちの１体で、昭和２年６月に檜原尋常小学校（現在の檜原学園檜原村立檜原小学校）に入国査証や衣装などと一緒に贈られ、歓迎式を行い子供達が歓迎の言葉を送りました。

ところが、第二次世界大戦がはじまり、太平洋戦争へ突入するとアメリカから送られてきた人形に対し敵国という憎しみをぶつける人もいました。

檜原村でも当時教頭をされていた田中氏から、女性の先生が校長室に飾ってあったパティちゃんのお尻を叩いていたというお話があり、田中氏はその晩にパティちゃんをだれにも言わずに宿直室の押入れに隠しておきました。

終戦後に進駐軍が来る前日に思い出し校長室に飾っておくと、それを見た若い軍人が喜んでいたそうです。

それからも校長室に飾られており、かくいう私も恥ずかしながら檜原小学校を卒業するまでに人形を見た記憶が無く、今回のお話があるまで実物を見た事がありませんでした。

現在では檜原村郷土資料館で展示しており、戸倉しろやまテラスで行われた花とアートと昭和の五日市町展の渋沢栄一生誕 100 年祭特別イベントで展示されました。

青い目の人形パティちゃん

檜原村での出来事

当時の記録はあまり残されていませんが、檜原村史などには、昭和１２年に日華事変（日中戦争）が起こり、昭和１３年８月に防空監視哨任命式を五日市警察署で行い、同年９月に東京都指定史跡（指定は平成３年）の檜原城跡の二の丸へ防空監視哨を設置、本土空襲への警戒を行っていたようです。昭和１９年頃には集団疎開で神津島や品川区の小学校などを受け入れ沖縄が戦場になった昭和２０年になると、檜原村にもアメリカ兵を見かけるようになり、下川乗地区ではアメリカ兵を発見し上川乗駐在所まで連行し、P-51 戦闘機が墜落した際には搭乗員１名を消防団の協力のもと近くのお寺へ埋葬しました。

歴史探求イベント

第４回となる今回は檜原の中でも古い歴史を持ち、難読地名の一つ「人里（へんぼり）」を歩きました、人里という地名は事貫（ことづら）・和田（わだ）・上平（かみだいら）の３組を１つにまとめて言う地名で、由来についていろいろな説がありますが、半島の言葉説や「へんぽつり」などの文字の誤り説など確定的なものはわかっていません。ただ、歴史的には村内で板碑が一番多く発見され、建武以前の古い物が南谷に１０基ありそのうちの８基がここ人里に集中していることから、古くから文化があり、栄えていた場所だったのは間違いないと思われます。

イベントではまず上平の山上に鎮座する五社神社へ向かいました。五社神社には平安期に造られた五大明王が安置されており創立は相当古いと考えられ、新編武蔵風土記稿には五大尊社と記されています。

先ほど五大明王が安置されていると書きましたが実際のところは、蔵王権現・不動明王※・菩薩形座像・軍荼利明王※・大威徳明王※・金剛夜叉明王※・木造仏残欠の７体あり、降三世明王※についてはこの残欠がそうではないかと言われています（※ついているものが五大明王を構成する一尊）

今回のイベントでは、地元であり元文化財専門委員でもある吉本村長が解説と案内をしてくださり、通常は非公開となっている木像を拝見させてもらうなど、大変有意義なイベントとなりました。

歴史探求イベント　五社神社内

明日に伝える戦争体験　戦後 80 年～平和をつなぐ

日野市郷土資料館

日野市では毎年 8 月を平和月間と位置づけ、当館でも戦争に関するパネル展示を行ってきましたが、戦後 80 年の展示ではこれまでと異なる方法で展示を行いました。

1 小学校文集『父母・祖父母が語る太平洋戦争』からの気づき

展示構想の始まりは、1980 前後に出された小学校文集（上掲）でした。当時はまだ家族から戦争の話を聞くことが直接できたので、この文集が成り立ちました。自分も祖母・父母から何かの折にふれ戦時中の話を聞いた覚えがあります。

それでは祖父母も戦後生まれが多くを占めるようになった子どもや若い世代は？このままでは、実際に戦争が起きたらどうなるのか、戦争の現実を知る人がいなくなってしまいます。若い世代にどうやって記憶をつないだらいいのでしょうか？

2 ストーリー仕立てのパネル、現代の目から見たコメント

今回の展示では、戦争を自分事化してもらう方法として＜人間の想像力＞に懸けました。従来のような説明文を中心としたパネルは少なくして、市民から収集した戦争関連資料と聞き書きに基づいたストーリー仕立てのパネルにして、見る側が主観（ボク・ワタシ）として展示の中に入り込み、戦争を追体験してもらうという形にしました。

また、職場体験の中学生たちに展示資料をじっくり見せて、戦争の時代に深く触れてもらい、そこで感じた違和感や驚き、悲しみ、考えたことなどを絵や文にしてもらいました。それらを資料と共に展示することで、過去と現在が交錯し、見る側も戦争について自分事化して考える（戦争が起きると暮らしはどう変わってしまうのか？空襲の恐怖は？子どもたちを取り巻く環境は？）助けとなり、戦争が起きた過去と平和を希求する未来をつなぐバトンの役割を果たしてくれました。

3 もう一つの気づき～戦争記憶を潜在的に受け継ぐ世代

戦争の聞き書きを行っていく中で、もう一つ気づいたことがあります。それは現在 40 代後半～60 代ぐらいの、戦争に行った世代を祖父母に持つ世代、まさに冒頭の作文を書いた世代のことです。聞き書きをしていく中で、子供世代には戦場のことを話さなかったが父親が、孫世代には涙をこぼしながら戦場でのことを語り、戦争を絶対にしてはいけない・・・と語ったというエピソードを展示しましたが、その方以外にも、子供には戦争体験を話さなかった父親が、最後だからと孫には話したという話をよく耳にしました。直接体験ではありませんが、孫世代が子どもには言えなかった戦争体験を聞いた世代でもあったのです。今後は、孫世代にも聞き書き（最後だからと話した内容等）すべきだと思いました。

4 これからに向けて

今回の展示は「わかりやすさ」を重視したあまり、制度面や戦争の経緯・経過等には、ほとんどふれることができませんでした。しかし戦争を直接体験していない世代が多くを占めるこれからこそが、資料や聞き書き等を通して「戦争」を伝えていくという地域博物館としての本領発揮の場となるでしょう。

今夏展示の反省点をふまえた上で改善を行い、戦後 81 年、82 年、83 年、84 年、85 年・・・・90 年、と 1 年づつ展示を積み重ねながら、戦後がこれからも続くことを願ってやみません。

開館20年を迎えて

日野市立新選組のふるさと歴史館　金野啓史

新選組のふるさと歴史館の概要

日野市立新選組のふるさと歴史館は、新選組に関する史料に基づいた情報発信を目的に、平成17年に開館した。新選組、日野宿、幕末維新をテーマに活動し、令和7年に開館20周年を迎えた。

日野市は新選組隊士の土方歳三、井上源三郎の出身地であること、甲州道中日野宿の名主佐藤彦五郎宅に設けられた天然理心流剣術道場に後の新選組の中核となる剣士が集ったこと、佐藤をはじめとした地域の豪農層、有力者層が新選組の活動を支援したことなど、新選組とのゆかりが深い。このため日野市では平成10年頃から「新選組のふるさと」を活かした地域おこし、まちづくりへの取り組みを始めた。平成16年に放映されたNHK大河ドラマ「新選組！」はその追い風となり、市では大河ドラマと連動した「新選組フェスタ」を約1年にわたって開催したほか、佐藤彦五郎の自邸で都内に唯一残る本陣建築である日野宿本陣を取得して一般公開を行うなど、「新選組のふるさと」としての認知向上に向けた環境整備や各種周知広報活動を展開した。これを一過性のものとせず、観光まちおこしの根幹として定着させることを目的に、新選組に関する常設の情報発信施設として設置されたのが、新選組のふるさと歴史館であった。

当館は、市民の教養、学術、文化の向上をはかり、地域文化の継承と発展に寄与することを条例に謳い、その主な活動を史料の調査研究、収集保存、普及啓発としている点は、他の博物館、資料館と大きく変わるところはない。しかし、全国からの新選組ファンや観光客の来訪を促すというミッションを課されていることから、教育委員会ではなく市長部局に置かれ観光施設として位置付けられている点が特色であると言える。

展示と調査研究

「新選組のふるさと」を館名に冠したものの、土方歳三をはじめ、井上源三郎、佐藤彦五郎に関する史料は子孫が運営する資料館が所蔵、公開しており、館が設置された際に日野市が所蔵していた新選組関連資料は数えるほどしかなかった。このため設置後1年の準備期間を経た後、新選組の事績を4期に分け、年1回の特別展を開催して史料と情報の蓄積をはかり、平成22年の通年公開に漕ぎつけた。こうした事情もあって、企画展や特別展に限らず常設展においても、展示を構成する史料には寄託、借用史料が多く含まれている。

新選組は京都を主な活躍の場とし、戊辰戦争に関しては東日本一帯に足跡が及んでいる。これに加え、母体となった浪士組や、浪士組の結成にかかわった清河八郎、浪士組を母体として庄内藩のもとで活動した新徴組などは新選組の理解に不可欠であり、東国を中心とした草莽の志士たちや、幕臣たちの動きも把握しておかなければならない。このため常設展のテーマを「新選組・新徴組と日野」とし、特別展、企画展でも、清河八郎や新徴組、山岡鉄舟など、一見日野市との直接的な関係が希薄に見えるテーマも取り上げてきた。

史料の調査、収集活動においても、活動の範囲は日野市内にとどまらない広範に及び、新選組とかかわりがある全国各地に赴いてきた。とりわけ清河八郎記念館（山形県庄内町）や、新徴組に関する史料を所蔵する鶴岡市郷土資料館（山形県鶴岡市）とは開館以来協力関係にあり、共催展も幾度か開催している。また、史料調査などの活動の成果は、特別展図録や史料集として刊行している。

当館は小規模な施設だが、大河ドラマ「新選組！」以降も続いた新選組人気を背景に入館者数は増加を続け、令和元年には年間20,000人を超えた。全体の7割以上が市外からの来館であり、その範囲は海外にも及んでいる。新型コロナウイルス感染症の影響により入館者数が低迷した時期もあったが、その後徐々に回復し、現在はコロナ禍前の水準に戻りつつある。

開館20年を迎えて

当館は以上のような活動を続けてきたが、その基盤となるのは、言うまでもなく地域に残る歴史的な資産である。新選組の活動は、日野市域のみならず、小野路（町田市）の小島家、谷保（国立市）の本田家、連光寺（多摩市）の富沢家といった多摩の豪農層・有力者層の支援によって支えられており、この地域には新選組とのつながりの深さを物語る膨大な資料がある。

このような多摩地域という視座から新選組を通して広く全国を見渡すことは、この地域の歴史的、文化的な立ち位置を明らかにするだけでなく、幕末維新期の東日本の政治・社会を正しく評価することにつながる。京都から遠く離れた日野市に新選組の展示施設を設置する意義はここにあると考えている。当館は新選組を追い求め地域の枠を超えた活動を展開してきたが、結果的には日野市や多摩地域のあり様を客観的にとらえることができたのではないかと、20年の活動を振り返り実感している。

令和3年の組織改正により、当館は教育委員会と市長部局が共管する「ふるさと文化財課」の一セクションとなった。郷土資料館や文化財担当と一体となったこの課においては、生涯学習と観光の両立はもとより、新選組を通して地域の視座から全国を見通すと共に、しっかりと地域にフォーカスした活動を展開することが、これまで以上に強く求められよう。

展示風景

昭和の小金井と出土した戦争遺物

小金井市文化財センター　佐賀拓実

はじめに

当館では、「地図と写真で読み解く昭和の小金井」（11/1～12/28 開催）と題した展示、昭和の小金井を題材にした「地域史講座」（全３回）を開催しました。また、令和７年に市立小学校敷地での発掘調査があり、太平洋戦争期の遺構・遺物が発見されました。

企画展について

企画展では、小金井の昭和史をテーマに、古写真や地図資料を用いた展示を実施しました。昭和 34 年-35 年頃に開店し、わずか数年で「西友ストア」となって姿を消した「小金井デパート」や、小金井にかつて存在した「セントラル劇場」や「名画座」で上映されていた映画看板など、写真と地図を照らし合わせて当時の諸相を感じていただけるように努めました。来館者の方々からは、「過去に小金井デパートがあったのだと初めて知ることができて興味深かった」、「昭和の時代に同じ社名で２つの小金井製作所があったことは勉強になった」などの感想をいただきました。時代を経て、昭和各年代の記憶が薄れつつある中、かつての小金井の様子に多くの来館者が関心を持たれていました。

企画展風景

発掘調査について

令和７年６月～９月、小金井市立小金井第一小学校の校舎建て替えに伴う発掘調査が行われました。縄文や江戸時代、そして太平洋戦争期の遺構・遺物が発見され、防空壕跡や焼夷弾、統制磁器等が出土しました。当校の前身である小金井国民学校の『学校日誌』によると、防空壕は昭和 18 年の秋頃から作られているようです。また、今回見つかった防空壕跡の一角からは、59 発もの米軍が投下した焼夷弾が積み並べた状態で出土しました。小金井での焼夷弾に関する記録は、『東京大空襲・戦災誌第３巻』（昭和 20 年１月 27 日の空襲）にあり、武蔵小金井駅の線路上、同駅構内に停車する電車へ焼夷弾が落下しました。加えて同書にて収録される、「帝都防空本部情報第 114 号（抄）（１月 27 日空襲）」によると、「爆弾/六・焼夷弾/五」と記されています。記録上では、59 発もの焼夷弾が落とされた形跡はなく、発見された焼夷弾は他の地域から持ち込まれたものなのか、今後の調査を進める次第です。なお、焼夷弾は陸上自衛隊により全て回収・搬出済みです。

発掘調査の公開について

当該調査現場の様子は、小金井第一小学校や周辺小学校の６年生が見学しました。発掘作業の様子を見てもらいつつ、出土した土器・陶磁器類にも触れる体験を行いました。また、一般公開用に見学会を同年９月に実施する予定でしたが、台風の影響で生憎中止となりました。一方で、市民から多くの要望があり、代替案として発掘報告会を同年 11 月に開催しています。

調査現場見学の様子

おわりに

戦後 80 年を迎えて、戦争の風化が課題となっています。当時を伝えるにあたり、小金井市立第一小学校で検出された遺構・遺物はその手がかりとなるものです。加えて、戦時を知る経験者の聞き取りや文献に残る記述など、「遺物」と「記憶」と「記録」を丁寧に拾い集め、整理することにより、多面的な諸相を明らかにすることが可能となります。多くの方に各々の歴史に興味関心を抱いてもいただくためにも、展示や講座を通して、これからも情報を発信していきます。

出土した焼夷弾

くにたちの考古学者　甲野勇と大湯環状列石
戦後初の大規模発掘調査

くにたち郷土文化館　爲國 翠子

はじめに

くにたち郷土文化館では2025年８月９日から31日まで、ミニ展示「甲野勇と秋田のストーンサークル」を開催し、併せて関連企画としてギャラリートークを実施しました。

甲野勇と秋田のストーンサークル

甲野勇は、1901（明治34）年東京に生まれた日本先史考古学者であり、縄文土器の編年研究において「編年学派の三羽烏」の一人として知られています。戦後は国立市に居住し、戦後は考古学にとどまらず、多摩地域の歴史や民俗の研究にも力を注ぎました。地域の発掘調査指導にも尽力し、国立市内では第一中学校の生徒と南養寺遺跡の発掘調査を行い、顔面把手付土器を発見しました。また、武蔵野博物館や八王子市郷土資料館など多摩地域の郷土博物館施設の設立にも力を尽くしました。その他にも、『ドルメン』や『ミネルヴァ』、『あんとろぽす』などといった学術雑誌に編集者としても携わっていました。くにたち郷土文化館には、甲野が遺した直筆の原稿や出土遺物の写真や実測図、発掘調査の様子を撮影した写真など多岐にわたる資料が多く収められています。（以後、「甲野勇氏資料」という）

本ミニ展示では、大湯環状列石のことを「秋田のストーンサークル」として、紹介しました。大湯環状列石は、秋田県北東部の鹿角市に位置する、縄文時代後期（約4,000 年前）の大規模な遺跡で、「万座環状列石」と「野中堂環状列石」の２つの環状列石が様々な形に組み合わせた組石を二重の円形状に配置しているのが特徴です。遺跡は1931（昭和６）年に耕地を整理している際に発見され、1942（昭和12）年には皇国史観のもと神代文化研究所が調査を行い、1946（昭和21）年に日本古代文化学会による学術調査が実施されました。その後1951・52（昭和26・27）年に文化財保護委員会（現：文化庁）による国営調査、1973～76（昭和48～51）年に鹿角市教育委員会による継続調査が行われた後に、2021（令和３）年に「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つとして、ユネスコの世界文化遺産に登録されました。

1946（昭和21）年の大湯環状列石調査

1946（昭和21）年８月、甲野は友人の中島健蔵から大湯環状列石についての話を聞き、江坂輝彌と野津甫（朝日新聞社記者）と共に現地へ視察に行きました。その視察で甲野は大湯環状列石のことを「日本ではじめて発見された巨石文化址」と折紙をつけました。

その後10月15日から３週間、日本古代文化学会による大湯環状列石の発掘調査は、朝日新聞社の援助のもと実施され、戦後日本国内初の大規模な調査でした。甲野をはじめ、後藤守一、江坂輝彌、吉田格、塩野半十郎、５名の研究者を中心に、地元の諏訪富多を中心とした大湯郷土研究会や地球化学研究所などの協力を得て調査を行いました。甲野たちは戦中の皇国史観による調査ではなく科学的根拠に基づいた調査を行いました。そして甲野は、大湯環状列石のように大規模な配石遺跡がつくられた縄文時代後期の社会は、狩猟や漁労、そして採集を中心とした文化ではなく、寒冷な気候にも適応する、ヒエやアワなどの栽培を基盤とする農耕文化へと進んでいったのではないかと発表しました。調査期間中は、野中堂と万座の両環状列石を対象に、実測図の作成や出土した土器の実測図作成や拓本とりなどが行われました。その成果は、後の文化財保護委員会が実施した調査の基礎資料にもなりました。

甲野勇氏資料の中には、江坂と吉田が手分けし書いた全24枚のレポート用紙に書かれた調査日誌や、後藤が指揮を執り描いた万座環状列石の1/100スケールの図面、その他に土器の実測図や遺物出土状況写真、調査風景写真などがあります。

大湯環状列石発掘調査日誌

おわりに

甲野は戦後『あんとろぽす』創刊号において、「改められる可き古代史は斯る遠祖の文化遺産を直接の基礎として編集せられる可きである。」と述べています。これは戦前の皇国史観に基づいた社会教育に対する抗議であり、大湯環状列石の科学的な発掘調査や郷土博物館を設置するにあたっての行動の源であったと考えられます。

本ミニ展示は、会期後に秋田県鹿角市にある大湯ストーンサークル館で出張ミニパネル展示が開催されました。その際、地元ならではの情報を新たに入手することができ、地域間の関係を構築することができました。

旧日立航空機株式会社　変電所

東大和市立郷土博物館 阿部 道子

企画展示「戦後80年　資料とエピソードでつづる戦前・戦中・戦後」

戦後 80 年の令和 7（2025）年 7 月 19 日から 9 月 15 日まで企画展示「戦後 80 年　資料とエピソードでつづる戦前・戦中・戦後」を開催しました。

戦争当時を直に知る人もだんだんと少なくなっており、家族から直接戦争体験を聞いたことがない方も増えているかと思います。戦争の歴史は記憶から記録へとその伝え方が変化しつつあるのではないでしょうか。そのため今年は記録から読みとく戦争体験をテーマとして様々な資料を展示しました。被災した立川工場の従業員の手記や、徴用令書等の公的な通知。そして、それらと並んで今年発掘された爆弾の破片も一緒に展示したのです。

さて、この破片にまつわる話をする前に、東大和市の文化財でもある戦災建造物について紹介したいと思います。

企画展の様子

軍需工場　日立航空機株式会社

今から 90 年ほど前、まだ大和村とよばれていた東大和の南側の土地の多くは畑や雑木林であり、工場の誘致は村にとって経済的に大きなメリットのある事業でした。

そして昭和 13（1938）年に、東京瓦斯電気工業株式会社（のちの日立航空機株式会社）という航空機のエンジンを製造するための工場が建設されました。工場のすぐ北には新たに迎える工員のための社宅なども整備され、大和村に新しく南街というまちができたのです。この工場では、最盛期には 13,000 人を数える工員が働いていたといわれています。

現在でも桜が丘の都立東大和南公園には、工場の施設のひとつであった変電所が残されています。この建物は、電気の電圧を調整し各工場へ送るための重要な施設でした。

工場を襲った空襲とその爪痕

戦局が悪化すると、しだいに日本各地の軍需工場は米軍による空襲を受けるようになります。立川工場も例外ではなく、特に 3 回の大きな空襲の記録が残っています。昭和 20（1945）年 2 月 17 日と、4 月 19 日、4 月 24 日です。この攻撃により 111 人の尊い命が奪われ、工場はその 8 割が破壊されたのです。

日立航空機立川工場への空襲の中でも最も規模の大きかった 4 月 24 日には、101 機の B29 が飛来し 1,800 発もの 500 ポンド爆弾が投下されたと記録されています。

昭和 22（1947）年に米軍によって撮影された航空写真では、戦後 2 年たっても撤去されていない瓦礫や埋められていない爆弾穴が確認できます。

戦後、従業員たちはわずかに残った変電所を含む工場設備を利用し、平和産業に転換していきました。そして変電所は平成 5（1993）年まで稼働を続けました。

市民運動によって変電所の保存が決まると、平成 7（1995）年には東大和市の文化財に指定されました。2 回の改修工事を経て、現在では毎週水・日曜日の 10 時 30 分～16 時に一般公開をしています。戦災建造物の保存に関して多くの方から賛同を得ており、ふるさと納税でご協力をいただいております。

このようにして変電所は戦前・戦中・戦後の実に 1 世紀近くの東大和の歴史を見守り続けることとなったのです。

その間には、昭和 51（1976）年と平成 2（1990）年に、工場があった周辺で不発弾が発見されるというできごとがありました。そして撤去のために、住民の避難や交通規制などが行われたのです。敗戦から何十年も経ってからのできごとでした。

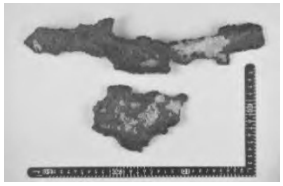
爆弾穴の発見

平成 2（1990）年に不発弾が発見されてから 35 年がすぎた今年、開発に伴う調査で爆弾穴と思われる痕跡が見つかりました。

直径 8m、深さ 2m を超えるこの穴は、前述の航空写真からは確認できません。恐らくは被災後すぐに埋められ、畑として活用されていたのではないかと推察されます。さらに穴の中から爆弾の破片と思われる金属片も多数見つかりました。

今回の爆弾穴の発見から、改めて当時の空襲被害の様子をうかがうことができました。戦後 80 年という節目にこうした発見があったことは、改めて平和に対する博物館の役割について考えさせられるものでした。

爆弾穴の調査の様子



出土した金属片

おわりに

記憶から記録へ、戦争に関する資料を保存し未来へ伝えていくことは当館の使命であると考えています。戦争にまつわる資料たちは、平和の尊さを私たちに教えてくれるものです。

これからも戦争の歴史を通して、平和の大切さを伝えていきたいと思います。

「戦争と多摩の人々」展における市民協働

パルテノン多摩ミュージアム　橋場万里子

はじめに

パルテノン多摩ミュージアムでは、戦後 80 年という節目の年にあたり、戦争を振り返る企画展「戦争と多摩の人々」を開催しました。過去の戦争関連の展示では、学童疎開・勤労動員や銃後の人々について取り上げてきましたが、今回はこれまで取り上げてこなかった「出征者」を中心に多摩市域の人々の戦争体験を取り上げることを軸に展示を開催しました。

本企画展は、市民学芸員との協働で進め、多くの成果を得られました。ここでは、「戦争と多摩の人々」展における市民協働の内容や展示の成果を紹介します。

■市民学芸員とともにおこなった調査活動

本企画展では、調査段階から市民学芸員の有志を募り、7 名ほどのチームを組んでデータ整理や調査をおこないました。会合では、たたき台を学芸員が提示し、必要な作業を分担し、市民学芸員が興味を持ったことの調査をおこなうとともに、展示の方法や構成についての議論をおこないながら進めました。

①『落合の軍隊記録』のデータ化

『落合の軍隊記録』は多摩市の落合地区（旧落合村域）の人々が、戦後、自らの出征経験を自発的にまとめた書物です。公開された出征先の記録がなかなか無いなかで、この記録はまとまった出征者のデータを得られる貴重な資料でした。今回、市民学芸員で手分けをして、この資料から年齢・出征経験・出征地などのデータをエクセルに入力する作業をおこないました。さらに、各出征地を世界地図にポイントを落として落合の人々の出征先を一覧できる地図を作成しました。

この膨大な作業は通常の学芸員単独による作業では到底できないものでしたが、市民学芸員のなかで内容に興味を持った方が積極的に進めたことにより、全データのエクセル化、地図データ化ができました。全体地図は展示の中心的な位置づけとなり、市民学芸員の意見も踏まえて、特大パネルとして会場に大きく展示をしました（写真）。

②彰忠碑の翻刻の検証と、新たな彰忠碑の発見、記録映像撮影

今回の調査では、多摩市役所そばにある戦没者の追悼碑（彰忠碑）の写真を撮影し、刻まれた人々の名前をすべて確認する作業もおこないました。この調査で碑に興味を持った市民学芸員が、散歩中に別の神社に新たな彰忠碑があることを見つけ、碑の建立者のご子孫に聞き取り調査をおこないました。

聞き取り調査のなかで、このご子孫が、戦後、市役所の彰忠碑が GHQ による破壊命令を逃れて埋められた後、掘り返され、再建立されたようすを目撃していたことがわかりました。この証言を記録映像として市民学芸員・学芸員が共同で撮影し、編集を加えて会場で上映しました。また、現在 90 歳を超える方が、23 区や立川の空襲で空が赤くなったことを眺めていたことや、低空飛行する戦闘機を目撃していたこともわかり、その証言も新たに記録映像に収録し、上映することができました。

③世界の地図とシンガポールの教科書の展示

市民学芸員のチームでは数回の会合を設け、展示内容についての相談、検討をおこないました。その際に、今後の戦争を抑止することにつながる「広い世界的視野」を提示することも必要ではないかという提案がありました。戦争に関しては様々な見方や議論がありますが、検討の結果、シンガポールの教科書が客観的かつ詳細に日本の侵略についても記載していることがわかり、この教科書を展示することになりました。

英語が得意な市民学芸員が教科書の目次を訳し、解説パネルを加えたうえで、戦争の記憶の継承に関するさまざまな試みや視点を紹介するコーナーで紹介しました。また、市民学芸員の意見により、展示冒頭には満州事変からアジア・太平洋戦争に至る過程を示した世界地図を表示し、戦争の全体像がわかるようにもしました。

このほかにも、親族の戦時中の資料の入手や、展示の方法の提案など、市民学芸員はさまざまな面で展示にかかわりました。

また、市民学芸員の成果とは別に、学芸員のほうで、全国的に残存例が少ない村役場の兵事資料群を確認して紹介するとともに、出征者と多摩ニュータウン開発のかかわりや、新住民の戦争の記憶を紹介する展示を加えました。さらに、多摩市遺族会や多摩市平和人権課の協力を得て活動紹介のパネルを展示し、近年アメリカから返還された日章旗のほか、新たに寄せられた出征者の戦地の写真や軍刀、水筒などの資料も展示しました。

■市民学芸員との協働で得られたこと

今回の企画展では、調査段階から市民学芸員がかかわり、展示プランについても討議するなど、これまで以上に市民学芸員の関与が深い展示となりました。戦争についてはさまざまな立場からの見方があり、細やかな配慮が必要となりますが、今回市民学芸員とチームを組み、議論しながら進めたことで、学芸員 1 人では成し得ない調査の進展があり、多様な視点が提示された展示とすることができました。

戦後 80 年となり、実際に体験した方からのお話は聞くことが難しくなりましたが、戦争に関して判明していないことは多く、さらに調査の継続や継承も必要です。そのようななか、市民学芸員との協働により、多彩な視点が得られ、新たな掘り起こしがおこなえたことに一つの可能性を感じました。なお、今回の展示では市民学芸員以外にも多数の協力者がおり、来館者からも戦争に関する記憶の紹介が多数寄せられました。博物館という場において、多くの方がさまざまな形で戦争の記憶と向き合うことができる方法を今後も模索していきたいと思います。

戦後蚕糸業の技術と教育をつなぐ
――女子蚕糸業教育展と地域連携の実践から

東京農工大学科学博物館　齊藤有里加

企画展「女子蚕糸業教育展」の開催

多摩地域は江戸期以来、養蚕と繊維産業が広く営まれてきた地域である。桑畑や養蚕農家が点在し、生糸生産や青梅・八王子の織物業は地域経済に欠かせない基盤であった。東京農工大学の前身である東京高等蚕糸学校や農学部の養蚕学科など多摩の蚕糸文化と本学とは深く結びついている。この背景を踏まえて当館が企画した「女子蚕糸業教育展」は、地域と大学の双方に根づく蚕糸技術の歴史を改めて見つめ直す機会となった。

本展では、明治 35 年に設置された蚕業講習所「女生本科」を起点に、女子が専門技術を学び製糸教婦として活躍した教育史を紹介した。理化学・機械・繊維の知識を体系的に学ぶ場が女子に開かれていたことは、近代の職業教育史の中でも特筆できる点である。展示資料には、授業風景の写真、教材類が並び、女子蚕糸業教育の特殊性への理解が深まった。また、戦後の製糸教育を実際に経験し大学で実習指導に携わった小此木エツ子氏への聞き取りを展示した。小此木エツ子氏は、戦時中の女子蚕糸業教育を経験し、その後本学を卒業して製糸教育に携わった技術者であり、当時の実践を語る貴重な証言者である。 戦前の制度の末期に在籍し、戦後の製糸産業の再建、自動繰糸機の導入期、さらに産業縮小の過程までを体験した世代として、蚕糸科学領域の研究を基に生糸の需要を外需から内需へと新たな革新につなげ、多摩シルク２１として地域との再接続を目指したその証言には戦後の多摩と絹産業を振り返る技術史的な価値がある。

未来へつなぐ蚕糸技術の継承へ

また、当館では展示や証言記録とあわせて、地域に根ざした技術継承の実践にも取り組んだ。2025 年 5 月に開催した「蚕糸技術座談会 2025」である。本座談会は、東京農工大学 150 周年記念「多摩シルク座談会」の成果を発展させ、多摩シルクライフ 21 研究会、博物館友の会絹サークル OB・現役、など、地域で活動する多様な担い手が一堂に会する技術交流の場として企画された。

座談会ではまず、小此木エツ子氏による講演「製糸条件による織物・糸の違い」が行われた。氏は、煮繭温度や巻き取り条件といった製糸工程のわずかな違いが糸の特性や布地の仕上がりにどのように影響するかを、実験結果と長年の経験に基づいてわかりやすく解説した。製糸の科学的理解と現場技術を結びつける内容は、専門性の高い参加者からも大きな関心を集めた。また、西岡千鶴氏による「クテ打ち組みひも」の座学と実演、さらに体験ワークショップを通して、参加者が自ら手を動かしながら素材と向き合う機会が設けられた。座学・実演・体験を組み合わせた構成は、知識と身体感覚の双方から技術を学ぶ場となり、技術継承の手法としても有効であった。

座談会の締めくくりとして、小此木氏は「これからの担い手に期待すること」を語った。製糸業の全盛期を知り、戦後の技術革新を経験してきた氏の言葉は、単なる激励にとどまらず、長い時間を生きてきた技術の歴史を次世代へ手渡す行為でもあった。産業としての蚕糸が縮小した現在、地域に残る技術への関心や、素材としての絹の新たな可能性を参加者が共有する場として、本座談会は重要な役割を果たしたといえる。

さらに、本座談会に先立つ 2025 年 5 月 10 日には、当館にて「女子蚕糸業教育―学理を学ぶ―」と題したシンポジウムを開催した。登壇者による講演では、女子蚕糸業教育の制度史、教育内容の特徴、女性技術者のキャリア形成などが取り上げられ、歴史資料と現代的視点を交えて議論が行われた。女子が科学的技術を学ぶ場が近代に存在していたこと、その教育が地域産業を支える技術者を生み出していたことが示され、参加者からは現代の理系女子教育と重ねて「歴史と現在がつながった」との声が寄せられた。

このシンポジウムと座談会をあわせて見ると、当館の取り組みが、過去の歴史理解から現場での技術継承、そして未来の担い手育成へと連続する体系となりつつあることがわかる。歴史資料の紹介、地域の実践者による技術交流、大学を拠点とした学びの機会創出が有機的につながり、当館の教育普及活動に広がりをもたらしている点は、大学博物館ならではの特色である。

東京農工大学科学博物館では、今後も展示・講座・技術体験を通じて、多摩地域とともに築かれてきた蚕糸文化の歴史を広く伝え、次の世代への継承に努めていきたい。技術は単独では残らず、学び手・使い手・語り手が揃うことで初めて持続するものである。地域に根ざす大学博物館として、こうした循環を支える場であり続けたいと考えている。

座談会で技術講演する小此木エツ子氏

企画展女子蚕糸業教育展

小金井公園と江戸東京たてもの園のあゆみ

江戸東京たてもの園　真下 祥幸

はじめに

江戸東京たてもの園は都内にあり、現地保存が難しい建造物を移築保存している野外博物館である。したがって展示資料の性質上、今回の特集タイトルである戦後８０年を展示として正面から取り上げることはないが、たてもの園とたてもの園が所在する小金井公園は戦時中に行われた紀元二千六百年行事という催しとの接点があり、戦争と直接関係はないものの、戦時中に計画された事業からその歩みをはじめているといえる。本稿ではこれを紹介することで、戦後から現在に至る小金井公園やたてもの園の歴史を振り返ってみたい。

紀元二千六百年記念行事

昭和１０（１９３５）年、政府は『日本書紀』に基づき、神武天皇が即位してから昭和１５年が２６００年目にあたるとし、記念行事を行うことを決定し、「紀元二千六百年祝典準備委員会」を発足させた。その後、この委員会は名称や体制を変えつつも準備を進め、昭和１５年には計画に基づき、日本各地で様々な行事が行われた。この間に日中戦争、第二次世界大戦が起こり、記念行事は戦時下で行われることとなった。

この記念行事の中核となったのが１１月１０日に行われた「紀元二千六百年式典」である。皇居前広場に５５，０００人の参列者を集め挙行された。この時、式典の中心施設として昭和天皇・皇后両陛下が臨御するために作られたのが寝殿造りの「式殿」という、のちの光華殿、たてもの園が開園してからは、ビジターセンターと名称を変える建造物であった。

式殿から光華殿へ

式殿は紀元二千六百年式典用の仮施設であったことから、当初式典終了後は解体の予定であったが、協議のなかで移築して利用することが決定された。移築先については紆余曲折があり、当初は砧大緑地が想定されたが、最終的に小金井大緑地に移すことが決定した。

式殿は国民錬成所（翌年教学錬成所となる）という機関の中心的な施設に充てるものされ、昭和１７年に移築が完成し、その際に「光華殿」と命名されている。光華殿の周辺には関連の施設が建てられた。

戦後になり教学錬成所は廃止されたが、光華殿を含むこの地には戦争中に被災した学習院中等科が移転してきた。当時学習院に在籍することになった皇太子明仁親王（現上皇陛下）は、この地で勉学に励まれた。その後学習院中等科は昭和２４年に戸山に移転したことにより、光華殿は使用されなくなり、しばらくの間光華殿に関する記録は見られなくなる。大きな転機となったのが武蔵野郷土館の開館である。

小金井大緑地と小金井公園

式殿の移築先として決められた小金井大緑地とは、昭和１４年、東京市の外周に環状的に緑地を配する環状緑地帯計画に端を発する。翌昭和１５年には環状緑地に該当していた場所は都市計画緑地として土地買収が行われるようになった。この時期が奇しくも紀元２６００年に当たることから、東京府も記念事業という名目で砧・神代・小金井・舎人・水元・篠崎の６か所に大緑地を造成することとしている。先に述べた砧と小金井はどちらもこの大緑地に含まれており、それまで江戸時代中期に新田開発された小金井周辺は用地買収により大きく姿を変えていった。戦後になり買収した土地は民有地として払い下げられたが、東京都は、改めて大緑地の頃の土地について用地買収を進めていった。その結果公園用地は広がり、昭和２９年１月１４日に小金井公園として現在の公園区域の西側部分が開園し、同日にはたてもの園の前身施設である武蔵野郷土館も開館した。光華殿は武蔵野郷土館の展示室兼事務室として３８年間にわたり利用され、考古学を中心に様々な研究活動や展示が催された。

武蔵野郷土館時代のビジターセンター

武蔵野郷土館は江戸東京たてもの園の開園に伴い、平成３（１９９１）年に閉館したが、光華殿は貴重な建造物として、また、たてもの園のビジターセンターとして継続して展示・利用されることとなった。このようにたてもの園のビジターセンターは戦時中に建てられた施設であり、何度も異なった目的で使用されてきているにも関わらず、解体されることなく現在に至っている。戦後を見つめ続けてきた貴重な文化財であり、今後とも大切に保存していくべき建造物である。

おわりに

公園と博物館といえば、普通は戦争とは関係のない施設であるが、その端緒はともに戦時中に行われた二つの紀元二千六百年事業に関係しており、その二つが結びついたのが、小金井公園とたてもの園のビジターセンターであった。

公園の利用者でこのような経緯を知っている人は少ないと思われるが、歴史を風化させることなくその土地の歴史については伝えていく必要があると思われる。

戦後 80 年とたましん美術館企画展

たましん美術館（たましん歴史・美術館）　相澤美貴

はじめに

当館では 2025 年度の展覧会として、夏期に「生誕 130 年　阪本牙城　タンク・タンクロー展」（会期：2025 年 7 月 19 日～9 月 28 日）を開催しました。この展示は、メインテーマこそ戦争ではないものの、近現代に生きた作家を取り上げた内容であることから、第二次世界大戦と密接にかかわる展覧会となりました。本稿では、この展覧会について紹介します。

美術館入口

生誕 130 年　阪本牙城　タンク・タンクロー展

阪本牙城（さかもとがじょう、1895-1973）は、東京府多摩郡五日市町（現・東京都あきる野市）出身の漫画家・水墨画家です。1934 年から連載を開始し当時の子供たちから絶大な人気を誇った代表作『タンク・タンクロー』のほか、多くの漫画作品を発表したことで知られています。1939 年には満洲に渡り、旧満洲開拓総局の広報担当も務めました。その後、第二次世界大戦が終戦すると、次第に制作の対象を水墨画に移していきました。本展は、このように漫画家でもあり水墨画家でもある牙城の画業の全貌を、美術館で初めて紹介する展覧会として企画したものです。

展示作品の中心は、画業の前期に制作した漫画作品やその原画、そして後期に制作した水墨画です。加えて、小規模なスペースながらも、牙城が満洲にわたり終戦後に帰国するまでの時期に関連する資料や作品も紹介しました。

牙城が満洲にわたっていた時代は、他の時期に比して残存する資料は乏しいながら、牙城の画業において大きな影響を与えていることがわかっています。とりわけ、展示資料のひとつである橋田邦彦『正法眼蔵釈意』（山喜房佛書林、1939 年）の白紙ページに牙城が自筆で記した文章からは、終戦を迎えてから日本に帰国するまでの苦悶する心情を読み取ることができます。

> 北鮮到着数日ならずして終戦となりそれより余等の受けたる迫害は言語に絶す。憂悶の一ヶ年間この書のみ余が座右にありて余を慰め余を啓発し余を鼓舞せり。この書ありてのみ余は失望せざりき。脱出の途中も所持品の殆どを奪略にまかせたるもこの書のみ残りて車中船中に於ても余が座右を離るゝことをなかりき。まことに正法眼蔵こそ余が藝道精進の前途に輝く炬火也。
>
> （部分抜粋、句点は本稿執筆者による）

『正法眼蔵』は禅僧の道元が著した曹洞宗の根本教典であり、『正法眼蔵釈意』はその注釈書です。上記の文章から、牙城にとって、この注釈書が、終戦後に帰国するまでの心の支えであったことがわかります。牙城は戦前から禅に親しんでいましたが、1946 年には故郷の五日市町にある禅宗（臨済宗）寺院の徳雲院に足繁く通うようになったほか、1949 年には禅僧である大森曹玄に師事し、本格的に禅に取り組むようになりました。牙城は帰国後も、しばらくは生活のために漫画を描いたものの、1956 年の『清水次郎長』を最後にわずかな例外を除いて漫画の執筆を終えます。そして、発表する作品の中心は、かねてからも制作をしており、禅とも関わりの深い水墨画へと移っていきました。

展示会場では、漫画に関する展示と水墨画に関する展示を結ぶ順路の間に、満洲にわたっていた時代に関する展示を配置しました。満洲にまつわる展示を挟んでがらりとかわる牙城の作品の雰囲気は、牙城の画業が多面的な顔を持つことを示します。それと同時に、牙城の画業において戦争が大きな転換点のひとつであったこともまた示しています。第二次世界大戦が当時を生きた芸術家を語る上で、ひいては近現代の芸術全体を語る上で、避けては通れない出来事であることを、再認識する展覧会になったと考えています。

展示風景

おわりに

当館で開催した「生誕 130 年　阪本牙城　タンク・タンクロー展」は、漫画作品と水墨画作品の展示を主軸にとした展覧会ながら、第二次世界大戦とも密接にかかわる内容となりました。当時に生きた多くの人々にとってそうであったように、当時を生きた芸術家にとって、そして芸術にとって、大きく命運を変えた出来事であることを改めて認識する必要があることを感じさせます。

地域と東京都立埋蔵文化財調査センター

東京都埋蔵文化財センター　宗像　義輝

はじめに

今回の特集テーマに沿って、東京都立埋蔵文化財調査センター(以下「調査センター」)、およびその運営組織である東京都埋蔵文化財センター(以下、都埋文)の来歴と役割変化について述べる。

多摩ニュータウンの開発と遺跡調査会の発足

戦後経済成長期の最中、都市部への人口流入により、住宅難は悪化の一途を辿った。こうした事態に対処すべく、法に基づいた大規模団地が全国で計画され、東京では八王子・町田・多摩・稲城の四市にまたがる多摩ニュータウンの開発が策定された。これにより、2900ha に及ぶ事業地内に存在する遺跡の記録保存に専従する組織も求められることとなり、昭和 40 年に「多摩ニュータウン遺跡調査会(以下「調査会」)」が発足するに至った。これが、都埋文の最初の姿である。

調査会は、まず、開発事業地内の遺跡数を把握するための分布調査をおこなった。その結果、事前に把握されていた数の倍近い 243 ヶ所の遺跡が確認されたのである。これを受けて、開発の影響範囲に含まれる 218 遺跡の記録保存を 5 年で調査する計画を策定、これらの調査と同時に、事業地内の遺跡範囲をより正確に把握するため、域内の基礎調査も併行しておこなった。その後も逐次基礎調査を行った結果、事業地内の遺跡数は 883 ヶ所に上り、遺跡調査会のような小規模組織では、とても対応できない状況が生じてしまった。

都埋文の発足

こうした事態を受けて、調査体制の充実を図るため、都埋文が昭和 55 年に調査会を発展解消するかたちで設立された。調査研究員 50 余名を擁したこの組織により、調査会発足から平成 17 年の事業終了に至るまでの足掛け 40 年に及ぶ世界でも類をみない大規模かつ綿密な調査が円滑に実施されたのである。昭和 62 年に最後の基礎調査が実施された結果、確認された遺跡数も 964 に及び、最終的な調査遺跡数は 771 箇所となった。また、多摩ニュータウンの事業量が減少に転じることが見込まれるようになった平成 3 年以降、都内全域の大規模公共事業に係る調査も手掛けるようになって現在に至っている。

普及事業への取り組み

調査会当時においても小規模な遺跡見学会等はおこなわれていたが、都埋文が発足すると、埋蔵文化財の普及事業にも一層力を入れるようになった。設立翌年の昭和 56 年には、都埋文本部が移転した多摩コミュニティー館において、展示・講演・映画観賞会を実施した。この際、より立体的な理解を深めていただくため、会場至近で行われていた遺跡の現地説明会も併せて行っている。昭和 59 年には、現在も刊行が続いている広報誌「たまのよこやま」も創刊された。

昭和 60 年 4 月に、多摩ニュータウン遺跡出土品・記録類を恒久的に保存するための施設である調査センターが開所し、都埋文も施設内に移転した。本来は収蔵施設であるが、小さいながらも展示ホールや会議室を備え、その後の普及事業への基盤が整うことになった。当初、普及事業については都教委が実施していたが、都埋文もこれに深く関与し、現在も続いている土器づくり講座などもこの年に始まっている。昭和 62 年には、施設建屋の東に隣接する多摩ニュータウン№57 遺跡の保存・活用を図るため、遺跡庭園「縄文の村」が整備された。復元住居 3 棟に加え、縄文時代中期を再現した植生は、40 年経った現在、名実ともに森の様相を呈している。

地域と共に

平成 7 年以降は、都埋文が調査センターの施設管理・運営を任されるようになった。また、平成 18 年以降は、指定管理者として調査センターの普及事業を担っている。この間、来館者数も倍増し、コロナ前の平成 27 年には 2 万 9 千人を数えるに至った。広報普及行事も拡充し、定番の講演会や勾玉作り、火おこしなどの体験行事に加えて、古代の糸作り、火おこし道具作り、トンボ玉作り、庭園を活用した自然観察会・遺跡ガイドツアーなどを実施、今年度の行事総数は 56 に上っている。職員が創意工夫を凝らした独自の企画も多く、また用具等から自作しているものもある。展示も、常設展示に加え、年 1 回更新の企画展示を行い、今年度は「土の中のトーキョー～近代考古学事始～」を開催している。

このように、調査センターおよび都埋文は、埋蔵文化財を展示する唯一の都立施設として、地域に密着した多摩ニュータウン遺跡の資料を核に、地域をはじめとする都民の方々の埋蔵文化財への親しみや理解のより一層の向上をめざしつつ、資料の恒久維持の責を担っている。

写真　センター展示室の様子

多摩六都科学館から見た戦後 80 年

多摩六都科学館館長　髙柳雄一

はじめに

多摩六都科学館は、小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市（以下「圏域」という）の五市が共同で設置し運営する地域の科学館です。科学館の愛称である「ロクト」は科学館設立時の六つの市（小平市、東村山市、田無市、保谷市、清瀬市、東久留米市）に由来しています。開館後、田無市と保谷市は合併して西東京市となり、現在は五市による共同設置と運営になっていますが、「ロクト」の愛称が今も使われているのは、科学館が誕生した地域の歴史的状況を残す一つの指標ともなっていると言えます。

多摩六都科学館が、科学を楽しみ、広く世界を知る「学びの場」をつくり、「地域づくり」に貢献する活動に取り組んでいる、この地域における科学と言う文化が果たしてきた歴史を、開館以前にまでさかのぼって、戦後 80 年という視点から眺めてみます。

市民感情と関わった科学の研究

多摩六都科学館が開館したのは、1994 年 3 月 1 日です。私が館長に就任したのは 2004 年 4 月 1 日、多摩六都科学館が開館 10 周年を迎えた年でした。館長を依頼されて、思い出したのは NHK 在職時に訪れた東京大学原子核研所や宇宙線研究所が、この地域にあることでした。宇宙や素粒子物理学の話題を番組にするにあたって、何人かの研究者に、旧田無市にあった施設でお会いしたことも思い出します。

東京大学の原子核研究所が、旧田無市に誕生したのは戦後 10 年目でした。日本学術会議の勧告（1953 年）に基づいて大型実験装置を持つ原子核素粒子研究施設として 1955 年 7 月に設立されました。それは第二次世界大戦後に禁止され、停滞していた日本の原子核研究を再開するために、原子核特別委員会委員長の朝永振一郎博士、初代所長となった菊池正士博士らを中心に地域への働きかけと多くの研究者たちの熱意により実現しました。

ただ、原子核研究所が旧田無市に設置されようとしたとき、住民の反対運動が起きていました。広島・長崎での被爆を経て終戦を迎えた日本人にとって、原子爆弾開発にも関わった原子核の研究は受け入れ難い科学です。特に、原子爆弾の模擬爆弾として知られるパンプキン爆弾が終戦直前の 1945 年 7 月 29 日、中島飛行機エンジン工場を狙って旧保谷市の西武柳沢駅南側に落とされたこともあり、原子核研究を受け入れるのには多くの旧田無市民が反対したことも頷けます。

こうした状況の中、朝永振一郎博士ら研究所設立を進めた当時の学術会議物理研究連絡委員のリーダーたちは住民と真剣に話し合いを続け、住民の理解を得て原子核研究所設立にこぎ着けることができました。この原子核研究所では原子核・素粒子・宇宙線に関する基礎的・先端的研究が 43 年間続けられ、現在の日本の物理学・科学の根底を支える研究成果をいくつも上げました。また「全国共同利用研究所」という革新的体制のもと、日本の原子核素粒子研究の最先端として、設備や研究体制の指標ともなり、日本の科学における人材教育や礎を築いた点でも大変意義深い施設でした。

1997 年には、この原子核研究所と、つくばにあった高エネルギー物理学研究所、東京大学中間子科学研究センターの統合により、現在の「高エネルギー加速器研究機構（KEK）が組織されました。また原子核研究所から生まれた宇宙線研究所は千葉県の柏に本部を設置して研究を継続しています。

科学の足跡を語り継ぐ使命

2001 年 1 月 1 日に旧保谷市と旧田無市が合併して生まれた西東京市の誕生を記念して、2005 年 4 月 29 日に、東京大学原子核研究所の跡地に市立公園「西東京いこいの森公園」が開園しました。公園内には「原子核研究所址碑」が建立され、開園に先立つ 4 月 24 日に、原子核研究所にゆかりの人々が集まって址碑の”お披露目の会”が催され、序幕式がとり行われました。多摩六都科学館の館長として、私もこの式典に参加しましたが、この地域で誕生した科学の研究が、地域を超えて発展したことも、この地域と共に歩む多摩六都科学館の活動の中では活かしてゆくべきだと、館長就任時に決意したことを思い出しました。研究所の移転から四半世紀経ち、地域には原子核研究所を知らない人の割合が増えてきています。地域の科学館として、科学の成果と共に、その探究が行われていた場について伝えることも大きな使命であるという思いを強くしています。

原子核研究所跡地の「西東京いこいの森公園」に置かれた石碑

おわりに

2024 年 3 月、多摩六都科学館は開館 30 周年を迎えました。今年は戦後 80 年、私にとっては館長に就任して 21 年目となりました。自然の仕組みを探り、人類が共有できる科学の視点は、地域の伝統を持つ多様な文化を一つの自然と言う世界として結ぶ役割も期待できます。多摩六都科学館は、地域における科学と言う文化が、戦後 80 年の中で、現在に至る 30 年をかけて生み出してきた成果だと言えるのではないかと信じています。

ギャラリー展「戦後 80 年―戦争とハンセン病」を開催

国立ハンセン病資料館学芸員　吉國元

はじめに

2025 年の夏。国立ハンセン病資料館は、ギャラリー展「戦後 80 年ー戦争とハンセン病」（共催：しょうけい館、会期：7 月 19 日–8 月 31 日）を開催した。戦争体験者とハンセン病療養所の入所者の高齢化・減少を迎えている現在、本展の開催にあたっては、戦争にまつわる患者・回復者の記憶をどのようにして後世に語り継ぐかという課題があった。本稿では、この課題にどのように応えたのかを述べながら、本展の開催報告を行う。

本展のポスター。

本展の概要

戦争とハンセン病をめぐる日本の近代史をたどると、戦争がハンセン病患者の隔離を強化し、さらに、戦争が隔離下の被害をより深刻にしたことがわかる。

ギャラリー展は三つの章で構成され、第一章では戦時下のハンセン病療養所を概観し、第二章では、沖縄戦における被害について、第三章では「軍人癩（らい）」と呼ばれる従軍経験のある患者について、関連資料を展示しながら解説した。

沖縄戦の被害

1945 年における国頭（くにがみ）愛楽園（現・沖縄愛楽園）の死亡者は 252 人、宮古南静園の死亡者は 109 人という記録があり、両園の死亡者が著しく多かったのは、沖縄に駐屯していた日本軍が地域のハンセン病患者を危険視し、患者の収容を武力で行った「軍収容」に起因する。この収容により、入所者の数が定員を大幅に越え、入所者は慢性的な食糧難と医療の不足に苦しんだ。そこに、米軍の爆撃が両療養所に直撃したため、入所者は「隔離」と「沖縄戦」という二重の被害を受けることになったのである。

ギャラリー展では、戦争の爪痕が今も入所者の近くに残されていることを伝えるために、沖縄愛楽園自治会の協力の下で、現在も園内にある水タンクに残されている米軍の砲弾跡を拓本で採取して展示した。

こちらの拓本に関しては、複数のメディアに取り上げられ、そのひとつには、「タンクが受けた無数の砲弾が奇妙な模様を浮き上がらせる。傷を負ったタンクの声を聞くーそれは写真とは違う痛みに触れる場となろう」と評された。（山田由佳「戦争は日常のなかにあった　いま行くべき戦争企画展」『週刊文春』8 月 14・21 日夏の特大号、2025 年 8 月 21 日発行）

残されたモノから、そのモノに関連する歴史（記憶）を引き出し、それを効果的に展示することによって記憶の継承という課題に応えることが出来たのではないかと思う。

砲弾跡の拓本は 2025 年 7 月 2 日に採取した。

「兵役ニ適セザル者」と「軍人癩」

ハンセン病患者は、強制収容の対象とされたのみならず、戦時中は「兵役ニ適セザル者」として兵役義務の対象から外された。その一方で、「国の役に立ちたい」という入所者の思いが利用され、園内では物資統制や食糧増産に加え、国防献金、神社礼拝、宮城遥拝・君が代斉唱・勅書勅語奉読などの国策に対応する取り組みがおこなわれた。総力戦体制のもとで、ハンセン病患者にも戦争協力が求められたのである。

一方、従軍した兵士や軍属が戦時中の苛酷な環境下でハンセン病を発症したケースがあった。そういった人は軍部で差別され、戦中及び戦後にハンセン病療養所への入所を余儀なくされた。

記憶に継承という課題に関しては、3 人の「軍人癩」の語りを収録した証言映像（しょうけい館制作）に見入っていた多くの来場者の後ろ姿が筆者にはとりわけ印象深い。来場者は、切々とした語りを聞くことによって、戦争と隔離下における被害を「忘れないでほしい」という当事者の想いに触れることが出来たのではあるまいか。先述のとおり、当事者が高齢下・減少するなかで、証言映像を収集しそれを活用することの意義は今後ますます深くになっていくことも明らかである。

関連イベントについて

一方で、第三者が当事者の経験を語ることの可能性を、しょうけい館語り部による講話会（ギャラリー展会場で 8 月 2 日、8 月 10 日に開催）に見ることが出来た。会場には多くの参加者が集まり、プログラムは、講話の主人公であった「軍人癩」の立花誠一郎に想いを馳せる時間ともなった。

さらに、しょうけい館の半戸学芸員と筆者が登壇したトークイベント「戦争の記憶に触れ、それを継承すること」（7 月 26 日に開催）では、立花が証言を語るにあたって、本名を隠すことを余儀なくされたこと及び、それでもまだ語られていない経験があるのではないかと半戸学芸員が指摘した。立花のほかにも証言を拒んだ元兵士は少なくなく、沈黙を選んだ・選ばざるを得なかった患者・回復者の経験をどのように考えるかという深刻な課題も明らかになったのである。

最後に、本展のテーマ「戦争とハンセン病」は、当館が 2019 年から行っているミュージアムトークの特集に引き継がれたことも記しておきたい。戦争の実相を通してハンセン病問題を検討することは、緒に就いたばかりである。

プラネタリウムの魅力と活用

コニカミノルタ サイエンスドーム（八王子市こども科学館） 立枝　菜津美

はじめに

コニカミノルタ サイエンスドーム（八王子市こども科学館）は平成元年に開館し、平成 29 年にリニューアルオープンをしました。子供達にプラネタリウムを通じて天文や宇宙の学習の機会を、また基礎物理を中心とした展示物の操作により科学の原理や応用について、さらに各種の科学教室の開催により自ら科学を体験し、学習する機会を提供する場として八王子市が事業運営を行っています。

当館の最大の特徴であるプラネタリウムはドーム直径 21m、座席は 218 席あり、非常に大きな設備です。通常投影番組、季節ごとに変わる解説員の生解説番組、毎月第三土曜日の夕方に投影する大人向けのトワイライトプラネタリウムなど魅力的なプログラムがあります。来館者のうち 7 割の方がプラネタリウムを観覧しており、プラネタリウムに高い関心があることが調査の結果分かりました。

プラネタリウムの魅力

さて、プラネタリウムの魅力とは何なのか。下記の通り分析してみました。

1　没入感

巨大なドームスクリーンが視界を奪い、余計な光を遮断し星の光のみが輝く空間は、自他の境界線が薄れ、まるで宇宙の中にいる感覚になります。

2　リラックス効果

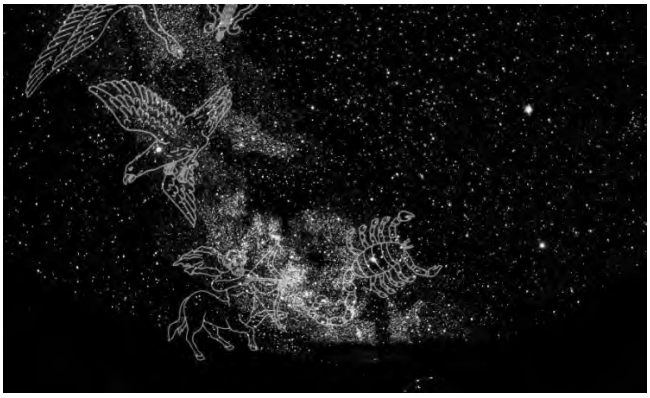
柔らかなナレーション、静かな音楽、宇宙を連想させる環境音は日常の喧騒を忘れさせてくれます。ヒーリング効果の高い番組は、夕方のトワイライトプラネタリウムで投影することがあり、子供達よりも大人に人気があります。

3　迫力のある映像

先にご紹介したリラックス効果とは反対の魅力になりますが、ドーム全体で投影し、まるで迫ってくるような映像が人気があるのもまた事実です。当館では定期的に恐竜をテーマにしたプラネタリウム番組を投影しており、大迫力の恐竜番組は子供達に非常に人気があります。

4　学習効果の高さ

例えばプラネタリウムで太陽系を旅しながら、惑星の特徴を映像で学習することは、教科書、インターネットで太陽系の図、惑星の絵や写真を眺めるよりも、楽しく、実感を伴って学ぶことができるでしょう。当館には小中学校がプラネタリウム学習番組を見学しに来館します。星座の解説が始まると、子供達は楽しそうに無数の星の中から星座を見つけ、解説員の話を熱心に聞いています。このような体験型の学習は知識とともに思い出にも残り、高い学習効果を期待できます。



夜空に投影された星座

プラネタリウムを利用したイベント

先にご紹介したプラネタリウム番組の他に、当館ではプラネタリウムを利用したイベントも開催しています。

1　星空コンサート

プラネタリウムドーム内でコンサートを不定期開催しています。ピアノ、フルート、オカリナ、バイオリンなど様々な楽器を用いて様々な団体が演奏をします。生演奏を聴きながら、プラネタリウムドームに投影された夜空を観覧することで、優雅な時間を過ごせます。

2　星空観望会

プラネタリウムで事前学習をした後、屋上で実際に天体望遠鏡を用いて星や惑星を観察するイベントです。プラネタリウムで観る天体も美しいですが、実際に望遠鏡で観察する感動は貴重な体験となります。

星空観望会の様子

おわりに

プラネタリウムは天文学を体験的に学ぶことができる貴重な施設です。より多くの方に当館のプラネタリウムを知ってもらうために、職員全員で日々努力をしています。そして当館のプラネタリウムや展示が来館者の皆様の新たな学習に繋がり、生活を豊かにする一助になれば幸いです。

まちの記録と記憶を伝える

八王子市郷土資料館　加藤 典子

はじめに

八王子市は昭和20年（1945）8月2日未明、B29爆撃機による空襲を受け、特に中心市街地はその80%が焦土と化しました。甲州道中に築かれた近世八王子宿から積み重ねられてきた「まちの記録と記憶」の多くが失われたことは、歴史研究者のみならず、市民にとって大きな損失であったといえます。

八王子空襲の焼け跡（斉藤五郎氏撮影、八王子市郷土資料館）

しかしながら、江戸・明治・大正・昭和と続いてきた「まちの記録と記憶」がすべて失われたわけではありません。伝存する紙資料や建造物等の記録をいかに保存・活用し、また将来的に失われていく人々の記憶をどのように語り継いでいくかは、地域とあゆむ博物館に科せられた使命であると認識しています。

本稿では「まちの記録と記憶」の保存・継承について、当館の事例を紹介するとともに、今後の展望を記します。

まちの記録

近世八王子宿のようすを伝える資料はあまり多くありません。当館では、八王子宿を構成する八日市宿の名主で本陣をつとめた新野家と、脇本陣の山上家の資料を所蔵しています。古文書は資料のデジタル化をすすめるとともに、その一部を「八王子市歴史資料収蔵品データベース」で公開しています。公開数はまだ少ないですが、宿の概況を知ることができる絵図を中心に掲載しました。また、明治から昭和期の市街地のようすを伝える絵葉書なども公開しています。一方、戦禍を乗り越えて先人が伝えてきた資料にはデジタル化しただけでは伝えきれない貴重な情報がつまっています。紙の素材や厚み、墨の濃淡など実物資料は情報の宝庫です。デジタル化をすすめるとともに、実物資料の公開・活用の実績を積み重ねていくことが重要です。

平成30年度までおこなわれた『新八王子市史』編纂事業では、当館所蔵の資料だけでなく多摩地域に伝わる資料も積極的に活用して中心市街地の歴史を叙述しました。幕末期の八王子宿に関しては、「里正日誌」（東大和市指定文化財）に残された八王子に関する記録を多用し、資料の不足を補完しています。

10年にわたる編纂事業を通して得た研究蓄積や他館とのつながりを途切れさせるのではなく、今後魅力的な展示会の開催に活かしていく必要があります。三多摩博物館協議会に所属する博物館との連携を一層強化し、情報交換を重ねていくことで地域の博物館として共に成長し、相互に助け合う関係が築かれていくことを期待しています。

まちの記憶

戦争体験者の記憶をどのように伝えていくかは博物館のみならず、市全体の課題といえます。本市では総務部総務課主催で毎年「平和展」を開催しており、展示や講座で当館が協力し、当館ガイドボランティアによる紙芝居「八王子空襲」の実演もおこなっています。また、令和7年度は新ミュージアム建設準備のため開催できませんでしたが、毎年8月には戦争に関する企画展、及び八王子空襲体験者を講師に招いての講座や、ガイドボランティアによる戦争体験の座談会を実施してきました。

これらの活動は今後も継続していかなければなりませんが、課題は山積しています。特にライフスタイルが大きく変化した現代において、当時は一般的であった言葉や事柄を聞き手側が想起できない状況が年々顕著となり、相互理解を阻む要因となっています。地域の博物館の役割は双方の間をとりもつ存在となることです。講演会の場合、事前に時代背景を聞き手側に周知する準備や、記憶に基づく話者の体験談を正確に聞き取り、事前調査をすることが重要です。当館では話者の体験談に登場する物品を展示したり、写真を用意したりすることで、当時の生活をイメージしやすい工夫をおこなっています。

戦争体験談だけでなく、昭和のまちなみを知る人も少なくなりました。地図からは商店の変遷などを追うことはできますが、実際のにぎわいのようすや、まちでの生活そのものを感じ取ることはできません。当館では、令和6年度にInnovate MUSEUM事業「共創で紡ぐ、桑都・八王子の歴史文化継承と博物館機能強化事業」が文化庁の採択を受け、市内の地域包括支援センターと連携し「白地図ワークショップ」を実施しました。市内大横町の白地図に当時のようすや思い出を付箋に書き込んでいただき、人々の「記憶の収集」をおこないました。この記憶の数々を今後どう活かしていくのかは博物館側の課題です。

大横町白地図ワークショップの作業風景

おわりに

当館では、本稿で紹介した以外にも市内大学と連携して八王子まつりの調査や、地域の聞き取り調査などを実施しています。このようにして集められた「記憶」を調査研究として報告できる内容にまで昇華していく作業は困難を極めますが、新ミュージアムの建設を前に、博物館の使命として「まちの記録と記憶」を継承することの重要性を改めて認識し、今後の博物館活動に活かしていきたいと考えています。

東京都立大学オープンキャンパスで実施したミニ展示企画

東京都立大学 91 年館　板久　梓織・塚本　将

はじめに

都立大学 91 年館では、昨年度に引き続き、大学オープンキャンパス（8 月 9 日・10 日）にあわせて特別ミニ展示を企画・実施しました。本稿では、その内容をご紹介します。

アフリカの布を見てみよう

1 つ目の展示は「アフリカの布を見てみよう」です。アフリカには地域や民族ごとに多様な布文化が存在します。今回の特別展示ではそのすべてを紹介することは難しいため、東アフリカに焦点を当て、布に込められたメッセージや布が持つ力に注目し、「布は言葉、布は力」という小テーマを設定しました。

マサイ・シュカとカンガの展示

今回のミニ展示では 2 種類の布を展示しました。いずれも現地の市場で購入したもので、そこに暮らす人びとの生活に欠かせないものです。どちらも裁断せずそのままの大きさで使用するため、展示では布を掛けて展示することで、そのサイズ感とダイナミックさを感じてもらえるよう工夫しました。

展示の様子（筆者撮影）

展示した布は片方がマサイ・シュカ（写真右）、もう片方がカンガ（写真左）と呼ばれるものです。マサイ・シュカはマサイという牧畜民が身につける布で有名ですが、マサイ以外の人にも広く使われています。寒いときにはこの大きな布で体を包むととても温かくなります。

一方、カンガは生活万能布と言ってよいほど用途の広い布です。家事をする際にエプロンとして腰に巻いたり、赤ん坊を包んだり、重い荷物を頭に乗せる時のクッションにしたり、ちょっと一休みしたいときはレジャーシート代わりに使ったり、女性がバイクに乗る時には腰に巻いて肌の露出を防いだり……一枚あるだけで暮らしのさまざまな場面で活躍します。さらにカンガには、メッセージやことわざがプリントされています。人生訓、愛にまつわる名言、政治的な意見など、口に出しにくい思いもカンガを身につけることで表現することができます。展示では、こうしたカンガのメッセージにも触れました。

関心事を広げる展示をめざして

91 年館の展示室では歴史・考古・社会人類・アート・動物・植物・地学の 7 つの専門分野の展示が行われています。さらにミニ展示を加えることで、より幅広い展示を楽しんでもらえるのではないかと考え企画しました。今回の展示が、来館者の皆さんの関心事を広げるきっかけになれば幸いです。今後も、日々展示充実させていきたいと思います。（板久梓織）

おみあしの多い企画展

もう 1 つのミニ展示企画「おみあしの多い企画展」では、筆者の研究対象である『多足類』をテーマにした展示を行いました。多足類とは読んで字の如く足の多い生き物グループのことで、民家によく出没するムカデとヤスデのほか、人生で出会う機会があまりなさそうなコムカデ、エダヒゲムシという仲間がいます（ちなみにダンゴムシは多足類ではなく甲殻類）。本展示ではこれら 4 つの仲間を実際に展示し、来館者の人生の一幕に多足類を刻み込むことを目指しました。企画名はどこか聞き覚えのあるような題名をもじって気軽に来てもらえる雰囲気を演出しました。実際の展示物は、標本に加えて生きた個体も展示するように努め、見慣れない生き物の生き様を目に触れられるようにしました。コムカデやエダヒゲムシなど、体長数ミリメートルの大変小さな生き物も展示しましたが、顕微鏡を通して一生懸命観察されていた来館者の方々が多くいらっしゃり、普段見えない世界への覗き窓を用意できる良い機会となりました。

この企画展ではもう 1 つの展示物を設けました。筆者です。筆者は多足類の系統分類の研究をしているのですが、研究者がふだんどのように研究をしているのかを展示することで、来館者にとっての学問・研究者への距離感を縮めていただくことを目的にしました。具体的には展示パネルに筆者の研究・調査の様子の写真を載せた上で筆者の研究の概要を紹介したり、実際に使用している調査道具（ホームセンターで買えるようなものばかりなのがミソです）や論文の出版の際に使用したスケッチの原図を展示したりしました。

おみあしの多い企画展
左：展示の様子
右：実際に展示したムカデ（ベニジムカデ属の一種）

学芸員養成課程がもっと身近になるように

天候に恵まれなかったにもかかわらず、会期 2 日間で計 454 人が 91 年館に来館されました。どちらのミニ展示もご関心をもっていただき、そちらから常設の展示施設への流入もうまくいきました。オープンキャンパスという、学びの場所を見学するイベントでの展示なので、ミニ展示のキャッチーさ活かした学芸員養成課程の周知も狙っていたのですが、「学芸員になるにはどうしたらよいですか」と質問する高校生も複数人来館され、こちらもうまくいったのではないかと思います。

本企画を通して未来の学芸員が生まれるきっかけになれば嬉しいです。（塚本将）

むいから民家園の近況報告

狛江市立古民家園（むいから民家園）

はじめに

当園は江戸時代に建てられた農家の長屋門と主屋の各1棟、平屋瓦葺の管理事務所1棟、果樹や池のある園庭、手作りの畑と田んぼからなる施設です。展示専用のスペースがないため、戦後 80 年や昭和 100 年に合わせた展示は行っていません。そのため当園の近況として、今年度 11 月上旬までに行った主な事業を報告します。

主な実施事業

●年中行事

端午の節供の五月人形、七夕の笹飾り、盆棚、十五夜と十三夜のお供えの展示を行いました。それぞれの展示には、解説パネルのほかに、より詳しく謂れや狛江市内で行われていた内容などを紹介した解説シートを、大人向けと子ども向けに作成し、ご自由にお持ちただけるようにしました。

年中行事にあわせたイベントとして、5 月 5 日に「子どもの日はむいからで楽しくすごそう！」を実施しました。生け花体験、けん玉やだるま落としや坊主めくりなどの昔あそびコーナーを設け、それぞれに参加してスタンプを集めるとお菓子釣りができるスタンプラリーも行い、たくさんの子どもたちで賑わいました。また、10 月 6 日には特別開園「中秋の名月を楽しむ」を実施しました。当日は閉園日でしたが、夕方から夜間のみ開園し、カマドで蒸かしたおイモ蒸しパンをふるまい、平日ながら多くのお客様にご来園いただきました。

●稲作と畑作

今年も園庭に設けた田んぼでは、狛江市の友好都市である新潟県長岡市川口地区（旧川口町）から苗の提供を受けて、コシヒカリを栽培しました。9 月に刈り取って掛け干しをし、脱穀・脱っぷを手作業で行いました。収穫した米は、畑で栽培している大根・蕪とともに、七草粥にしてふるまう予定です。

畑では他に里芋の栽培や、FC 東京との連携事業として狛江市の特産品である枝豆の栽培を行いました。枝豆栽培は小学生の参加者を募って種蒔きから収穫までを体験していただくとともに、収穫した枝豆は主屋のカマドで茹でて市民にもふるまい、とれたての枝豆を味わっていただきました。

●イベント事業

夏の恒例となった「みんなのむいから夏祭り」は、みんなのむいから民家園事業実行委員会に委託し行っている事業で、8 月 23 日に開催しました。盆踊り、怪談、和太鼓演奏などが行われ、かき氷やたませんなどの出店、飲み物の販売もあり、昨年比 1.7 倍の来園者で大賑わいとなりました。

秋の芸術鑑賞として、都立狛江高等学校箏曲部による「むいからお月見音楽会」と、狛江能楽普及会による「むいから能楽鑑賞会」を開催しました。お月見音楽会は小雨降る中でしたので、園庭の客席に急遽テントを張る対応を取りましたが、生徒たちの演奏に満席となった客席から温かな拍手が送られました。能楽鑑賞会も雨天となりましたが、最後の演目「初雪」では、今年度初めて園庭に設営した張り出しの舞台を使用し、夜空の下、幻想的な雰囲気の中で舞をご披露いただきました。能楽鑑賞会をより楽しむための事前学習の機会として、2 度の「能楽講座」も行いました。

●新しい取り組み

管理事務所棟以外は空調の効かない当園にとって、近年の酷暑にどう対応していくかは大きな課題です。来園者はもちろん職員の安全も守りながら、運営や維持管理に努めなければなりません。その対応法を検討し来園者数の状況をみるため、夜間開園と臨時休園を試行しました。具体的には、8 月 1 日（金）から 8 月 8 日（金）まで（4 日の休園日を除く）、通常は午後 4 時 30 分に閉園するところ午後 7 時 30 分まで開園し、8 月 9 日（土）から 14 日（木）を臨時休園としたものです。今回の結果や職員からの聞き取りなどを踏まえ、来年度に向けて検討を重ねていきます。

事業では、昨年度 1 月より「むいから文化財講座～建築の見かた、楽しみ方～」を開講しました。年間に 6 回程度、市内や近隣自治体に所在する歴史的建造物を訪れ、各見学先の学芸員・文化財担当職員の方々や、建築史家で当園運営評議会委員の稲葉和也氏にご案内いただくことで、建築への理解を深めることを目的とした講座です。各地で丁寧にご案内いただけることで参加者の満足度が非常に高く、少しずつ新規のリピーターの方が増えている状況です。

●その他

定例行事としては毎月第 1 木曜日と第 3 土曜日に子育て支援も兼ねた「古民家園であそぼう」、第 4 土曜日に「昔あそび体験」を実施、また、祭りや昔話をテーマにした民俗学講座は、元法政大学講師で当園運営評議会委員の長沢利明氏を講師に、令和 4 年度の初回から 20 回目となりました。学校との連携では中学生の職場体験を受け入れました。

今年度内には、七草粥ふるまい、小正月のまゆ玉展示、節分の豆まき、桃の節供のひな人形展示などの年中行事とその関連イベント、かまどで朝ごはん、正月用の生け花講座、もちつき体験、小学 3 年生の昔の暮らしの体験学習受け入れなどの事業を実施する予定です。

おわりに

当園で実施する事業の考え方として、①地域の歴史（文化財・史跡）や民俗（伝統文化・生活文化・伝統芸能）を伝える、②地域の歴史や民俗に触れる機会、学ぶ機会を提供する、③地域に開かれた施設としてにぎわいを提供するの 3 つの柱があります。今年度は昨年度の実施事業を踏襲しながら、その実施継続可能性を検討してきました。さまざまな課題や難しい状況もありますが、多くの方々のご協力をいただきながら、文化財建築の保存と活用に取り組んでまいります。

戦争関係資料の活用の現在～武蔵野市の取り組みから～

武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館　髙野 弘之（公文書専門員）

はじめに～現状～

当市にはかつて東洋一とうたわれた航空機用発動機工場中島飛行機武蔵製作所が存在していた。同製作所は極めて高い生産性を誇り、東日本初の米戦略爆撃機 B-29 による爆撃を受けた。当市は同製作所初空襲の日（昭和 19 年 11 月 24 日）を武蔵野市平和の日条例に基づき「平和の日」とし、同条例に基づく平和事業（市民部市民活動推進課所管）を積極的に展開している。

当館は令和 6 年 12 月に開館 10 周年を迎えたが、開館以来戦争を直接取り扱った企画展を毎年開催している。展示を繰り返すことで新たな情報の提供や史資料の寄贈など市の内外を問わず様々な協力を得て、調査研究を進めることができた。その結果、令和 7 年度時点で「戦争と武蔵野」を冠する展示 11 回、これを冠さない戦争関係展示 5 回、またこれとは別に市・東京都共催の東京空襲資料展 2 回を開催してきた。令和元年には行政職の館長自ら企画展を担当し、コロナ禍真っ只中の令和 2 年でさえ「戦争と武蔵野」展を開催する等、各担当者たちの継続した努力は筆舌に尽くし難い。なお、蓄積してきた成果は令和 6 年度の常設展リニューアルに反映されて「中島飛行機コーナー」の常設化につながった。令和 7 年夏は特に猛烈な暑さに連日見舞われたが、直前の企画展に比して図録配布数では 3 倍超に達する実績を得る等集客は好調である。当館の行う事業は平和事業とは別であるが、いずれにせよ先の大戦に限らず戦争に関係する情報やイベントに対する市民の関心は高いと言ってよい。

戦争を取り扱うコンテンツは終焉を迎えているのか？

一方全国に目を広げると、先の大戦にかかる戦争体験者の語り等を中心とした平和教育について「行き詰まり」等の表現を用いたマスコミ等の報道が散見される。平和教育が追悼や祈り等の態度喚起にとどまっている等の指摘もある。これが本来誇るべき「長すぎる」戦後とこれに伴う平和に起因するならば、「行き詰まり」も歓迎されるべきであろう。だが、戦争やこれに関連する体験への共感を得ることが難しくなっていることを「戦後 80 年」と語り部に代表される担い手の不足や高齢化に収斂させ、その終了を嘆くだけでよいのか。既存の平和教育が活動の転換を迫られている現状については理解できるが、少なくとも博物館施設は戦争を取り扱うコンテンツを同様の危機に陥らせてはならないし、陥る必要もない。

戦後を取り扱うコンテンツ～武蔵野市の現状～

当館では戦争を単独の「点」の出来事として扱うのではなく、戦前・戦中・戦後、そして現在までの「連続」として捉え、全体の流れを意識した企画展を実施している。一般には「戦後も扱っている」と見えよう。例えば前述の製作所跡地および施設の一部を利用して昭和 28 年に米空軍軍人および家族の宿舎「グリーンパーク」が完成したが、令和 5 年度の企画展ではこれを取り上げた。令和 7 年度は前述の製作所に納品していた商店の創業、これの所在する商店街の草創期から現在までの変遷を取り上げた。「戦争と武蔵野」の冠であっても内容を工夫している。

令和 4 年度からは毎年「記憶と記録の継承」について一章を割き、直接体験者の死没や資料の散逸による継承の断絶や歴史的事実の埋没等へ警鐘を鳴らし、これに加えて資料は保存のみにとどまらず積極的に活用することが重要であると強調してきた。近年は生涯学習団体の高齢化や活動の低調化も憂慮されているが、令和 7 年度には武蔵野地方史研究会と連携した展示を行った。教育委員会が果たす役割の重要性を指摘し、当市が掲げる「学びおくり」の実践報告とした。資料を保存し利用させる機関である私たちにとって、資料利活用の主体を支援し続ける事こそ教育委員会が社会から期待されることであろう。

博物館が果たすべき社会的使命とその方法論

博物館における戦争関係展示が終戦記念日など特定の時期に限定された恒例行事のようになっている、という批判もある。「平和」が当たり前になった今、戦争関係展示の提供する情報は質・量ともに転換を迫られよう。戦争体験者が持っていた前提知識や情報を館が丁寧に提供する必要があるし、何のための戦争関係展示なのか市民へ問い、また館自らも問い直さねばなるまい。当館は戦争を「平和」の対義語としてとらえ、戦争の情報を史資料を通じて市民へ丁寧に提供し続けることで戦争観を確立し、もって「平和」観を浮き彫りにする方法をとっている。「戦後」が長くなればなるほどこの任は重く困難となるが、これからも「戦後」を続けさせるための一つの方法ではないか。

おわりに～公文書館にとっての 80 年とは～

当館は公文書館機能を備えていることから「80 年」の意味について公文書館の視点から指摘しておきたい。

当市は市役所から移管された非現用文書を市民へ利用提供しているが、その際に個人に関する情報等については利用制限（いわゆる黒塗り）を行う。この利用制限範囲は、文書の作成・取得から一定の時間を経ると段階的に縮小することになっている（「時の経過」）。国立公文書館を例にすると、同館が参考として示す審査基準[i]では、50 年経過することで個人に関する情報すなわち学歴・財産・採用・勤務評定等を、80 年では重要な個人に関する情報すなわち国籍・家族・信仰・思想・犯罪歴（罰金以下）を利用制限対象から外すという例示が行われている。80 年経てなお行政が利用制限する情報は、拘禁刑以上の犯罪歴や重篤な遺伝性疾患や精神障害などに限られる。つまり、公文書館にとっての 80 年とは、個人に関する情報の大部分を自らの責任で市民へ利用提供し始める年である。基礎自治体が所蔵する各種文書には、個人に関するセンシティブな情報の記載が膨大である。もはや「戦前」の大部分の情報は利用制限に該当しないという新たな覚悟をもって 81 年目を迎えるべきである。

[i] 独立行政法人国立公文書館における公文書管理法に基づく利用請求に対する処分に係る審査基準 https://www.archives.go.jp/information/pdf/riyoushinsa_2011_00.pdf

戦後 80 年・開館 10 年の節目を地域とあゆむ大学博物館

帝京大学総合博物館　甲田篤郎

帝京大学総合博物館（以下本館）は、2015 年 9 月 14 日に帝京大学八王子キャンパス内に設置された博物館です。その設置目的にある「本学の教育・研究活動と連携し、総合的・学術的な活動を行い、その向上を図るとともに、それに必要な、歴史、芸術文化、自然等の 資料を収集・保管する。併せて教育・研究活動の成果の公開や、 他機関との連携を通じて、大学の社会貢献を推進すること」を実現するため、博物館運営をどのような展開してきたのか、戦後 80 年・開館 10 年の節目となった 2025 年の取り組みを振り返ります。

■戦争と帝京商業学校

本学の起源である帝京商業学校が東京府豊多摩郡代々幡町（現:渋谷区幡ヶ谷）に開校したのは、満州事変がおこった 1931 年のことです。そこから、1945 年 5 月 25 日深夜、都心から杉並にかけての東京西部を標的とした山の手大空襲で校舎が全焼し、他校の空き教室を転々としながら、1947 年に板橋区加賀の東京陸軍第二造兵廠跡に移転し、授業を再開するまでの期間は、「戦争」の影響のなかで教育を継続・発展させた本学にとっての草創期といえます。

戦後 80 年を直接意識した展示・企画は本年実施できていませんが、常設展やその他展示のなかで、戦争や当時の社会と本学の関係を調査・公開を続けています。戦災の影響もあり本館に残された資料は僅かかつ、同校で直接学んだ世代が少なくなり、聞き取り調査等の実現が年々難しくなるなかで、他機関との情報共有の重要性が増していることを実感しています。これまでも調布飛行場の造成や旧日立航空機株式会社など多摩地域での勤労動員の記録、卒業生の戦争体験について貴重な情報を本協議会会員館よりいただきました。同校や関係者について記載の資料/情報があれば、ぜひご一報を賜れれば幸いです。

■内戦と伝統工芸

戦後 80 年を経ても、世界各地で内戦・紛争は絶えません。2025 年 10 月 25 日～2026 年 3 月 31 日に開催した巡回展「シリアの伝統工芸」は山梨県笛吹市にある帝京大学やまなし伝統工芸館主催で、シリアの伝統工芸を担う 4 人の作り手たちを、彼らの作品とともに紹介しました。2011 年に民主化をもとめるデモを独裁政権が弾圧したことから内戦がはじまり、伝統工芸の職人たちも、多くが故郷をはなれざるを得ませんでした。難民となって全てを失いながら、避難先でゼロから生活を立て直し、伝統を守り続けたばかりか、苦境の中で新しいアイデアを次々と生み出し、伝統工芸の可能性を広げています。

トルコ カジアンテプで生産を再開したバラカート社製のアレッポ石鹸

■開館 10 周年記念企画展

2025 年 2 月 27 日～8 月 30 日に開催された企画展「ホネホネワンダーランドー骨の不思議を探るー」は、骨の起源から文化史、最新医学・医療までを貴重な資料や映像を通して紹介した展覧会です。本学には、「骨」をキーワードに研究を進めているさまざまな分野の専門家が在籍し、その成果を生かした幅広い活動を行っています。本展覧会は、それらの研究に関連して集められた貴重な資料を紹介するとともに、関係機関が所蔵する骨の起源から進化の歴史をたどることのできる古生物の化石や、現生の動物の骨の標本、特殊な方法で撮影された骨の貴重な映像から骨の不思議に迫りました。八王子キャンパス内で発掘された、横穴墓に葬られた古代人の頭蓋骨から、生前の姿を探る研究は、周辺地域に住む多くの来館者の注目を集めています。

■公立博物館との協働

学生が中心になり八王子キャンパス周辺のキラリと輝く、多摩の歴史・文化・自然・現在に関する魅力を調査・取材を通して記録するフリーマガジン『ミコタマ』は、2025 年 3 月 1 日に 9 号を発行しました。本号は、「八王子市郷土資料館と帝京大学総合博物館との連携協力に関する協定」に基づき、八王子市郷土資料館を中核館とする文化庁 Innovate MUSEUM 事業地域課題対応支援事業「共創で紡ぐ、桑都・八王子の歴史文化継承と博物館機能強化事業」の助成を受け刊行しています。同館学芸員と本学日本文化学科教員・学生、編集部学生による八王子市狭間地域の協働巡検記をはじめ、メカイ、ふだん記、織物、養蚕などを扱った「八王子にいきる」をテーマとした特集号です。

「明日の大学」の使命と大学博物館

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館　具嶋恵

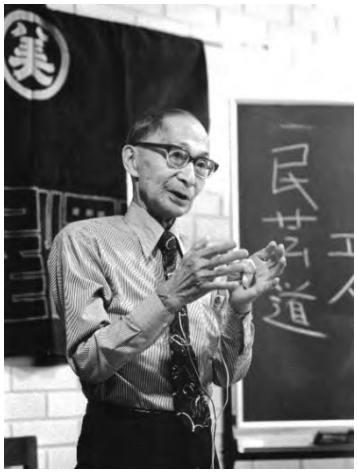
戦後とともに生まれた「明日の大学」

本学国際基督教大学（International Christian University：ＩＣＵ）が、敗戦からの復興まだ浅い 1953 年に開学した背景には、戦争で傷ついた国家間の和解を願う日米の人々の強い意志がありました。そのひとり、初代学長湯浅八郎（1890-1981）は、徹底した人間本位を信念とする「明日の大学」を夢見て、自由にして敬虔なる学風を謳いました。その命名のとおり国際性（International）、キリスト教（Christian）、そして真理と自由に基づく学問（University）の３つを使命として掲げ、国際的な社会人としての教養をもって、神と人とに奉仕する志高い人間を育て、恒久平和の確立に資することを目的としたＩＣＵの歩みは、大戦という未曽有の苦難を経た世界の、新しい時代への希求を色濃く反映したものとして始まったのでした。

湯浅八郎と民藝

京都帝国大学教授、同志社総長を経て、戦後はＩＣＵ設立のために尽力し、初代学長、のちは理事長として学府の礎を築いた湯浅八郎には、大学における教育者、専門の昆虫学の研究者、そして信仰篤いキリスト者であるほかに、もうひとつの顔がありました。それは熱心な民藝コレクターです。

同志社中学を卒業後、18 歳で「少年移民」としてアメリカに渡った湯浅は、異国の地で働きながら苦労して学位を修めたものの、帰国して大学の教壇に立った時、ふと自らには「東洋的教養」が欠けているのではないかという不安に襲われます。そこで出会ったのが柳宗悦の唱える民藝運動でした。彼は無名の職人が生み出す無為自然の手仕事の美しさに心打たれ、すぐさま京都の東寺や北野天満宮の朝市に通い、自らコツコツと蒐集活動を始めます。そうした中で民藝にまつわる人々や慎ましやかな品々に人間の真価を見出し、より良い社会のありようを重ねて考えたところに、湯浅という人の真骨頂があると言えるでしょう。


民藝の講義をする湯浅八郎

晩年には京都民藝協会会長に就任、ＩＣＵでは学生を前に「民芸の心」と題した講義をおこない、民藝こそが自らが目指す教育理念、すなわち「明日の大学」の実現に直結する理想であると語っています。

民藝に託された大学の使命

残された講義録音には、自らの来し方を振り返りながらＩＣＵの目指すところを説く湯浅の淡々とした口調が刻まれています。しかしその声が時に熱を帯びることがありました。それが、先の戦時を顧みる場面でした。「あなた方の知らないかつての日本は、本当に、二度と再びあってはならないような日本でした。それが二度と再びないという保証は絶対にありません。私なぞのような者さえ国賊と言われた時代、日本全体を支配したあの時代の浅ましさ、愚かさ、その残酷な非人間的な風潮――（略）」「あの権力の世界になると、権力闘争とか、国家というような人為的なものを中心に考えがちです。国家を最高の権威と見るような人々の組織の中にいてものを考えている人の中には、ありし日の日本が良かったと言う人もあるのです。それは、我々、日本人の一人として、やっぱり反省すべき課題なのです」（以上、『民芸の心〔新装和英版〕』（教文館、2023 年）より）

『民芸の心〔新装和英版〕』（教文館）

心を語り継ぐ大学博物館

湯浅は生前、自らの膨大な民藝コレクションの中からおよそ 7,000 点をＩＣＵに寄贈しました。それを受けて大学は博物館の設置を準備、しかしながらその完成を待たず、1981 年に湯浅は逝去します。その名を冠する大学博物館が開館したのは、翌 1982 年 6 月のことでした。

湯浅八郎記念館民芸常設展示室

湯浅は柳の『心偈（こころうた）』の一節、「見テ知リソ、知リテナ見ソ（まず見なさい、知ってから見るのではなく）」の教えそのままに、民藝の品そのものを解説することは好みませんでした。初代学長の本学創設・育成に対する貢献を記念する当館が、その功績を顕彰する施設ではなく、彼が一心に蒐集した民藝コレクションを以て開設されたところに、この館の担う役割があると、私たちは考えています。米寿を祝う会の式辞で教え子たちに湯浅は次のように呼びかけました。「卒業生諸君、貴下方の母校ＩＣＵは徹頭徹尾、人間本位、人間尊厳をモットーとする、天下に一つあって二つとないユニークな大学です。永遠の使命をもつ“明日の大学”です」――戦後 80 年を迎えた今、「民芸の心」を通して湯浅が訴えたＩＣＵの使命を、大学博物館として学内外に伝え続ける役割を改めて惟みながら、彼を始めとする先達たちが人間の尊厳を取り戻そうと努めた「戦後」が、この先も継続していくことを願って止みません。

日本獣医生命科学大学の成り立ちと戦争

日本獣医生命科学大学付属博物館　石井 奈穂美

■ はじめに

日本獣医生命科学大学付属博物館は、2015 年に開館した大学付属の博物館である。三博協加盟館の中では比較的新しい施設だが、学校としては 140 年を超える長い歴史を持つ。その成り立ちと歴史を語る上で、旧日本陸軍との繋がりと戦争の影響を外すことはできない。

■ 本学の成り立ち

日本における近代獣医学教育は、明治時代に始まったとされている。開国後家畜の輸入を開始した日本政府は、輸入した家畜の死亡率の高さから西洋の新しい知識を持った獣医師の養成が急務であると判断し、ヨーロッパから招いた獣医師を教師とする学校の設置を決断した。こうして、官製の学校として 1875 年に農事修学場に「獣医学校」（後の駒場農学校、現在の東京大学農学部）が設置され、1877 年から獣医学の授業が始まった。

当時輸入された家畜の中でも、馬の存在は軍事力の一つとして重要視されていた。陸軍は独自に馬医の養成を進め、1875 年に陸軍病馬院内に「馬医学舎」を設置している。この馬医学舎の卒業生である青年獣医官 9 名※（一柳直宰・小沢温吉・柳沢銀蔵・小野打悦次郎・黒須宗直・木村典・田沢直孝・横山正令・黒瀬貞次）が設置した学校こそが、本学の最初の姿である。官・軍につぎ、私立としては初めての獣医学教育の場であったことから、校名もそのまま「私立獣医学校」としていた。

開校当初の私立獣医学校は小石川区（現 文京区）大塚坂下町にある護国寺の境内の一角を借りて授業を行っていたが、獣医学教育のために必須となる馬の解剖について学校側と護国寺側で折り合いがつかなかったことを理由の一つとし、1883 年に区内の小日向茗荷谷町へ移転している。移転先の校地の隣地には陸軍の病馬厩が設置されていた。

同校の初代校長には陸軍においてフランス人教師の通訳を務めていた荒井義通が就任している。また、陸軍上等獣医として軍での馬医学教育に携わっていた深谷周三が教員を務め、そのほかの教員たちもみな陸軍獣医官を兼任していた。そのため、軍の整備に伴う教員の転出・移動により次第に授業に支障をきたすようになり、同校は 1889 年に閉校となった。このように、初期の本学の歴史には陸軍獣医の存在が大きく関わっている。

その後の本学は、校地と校名の変更を繰り返しており、その間の校地や教員の選定にも陸軍との繋がりが見受けられる。1937 年に現在の校地である武蔵野町（現 武蔵野市）にたどり着き、翌年からは「日本高等獣医学校」として獣医学教育を開始したが、この頃から戦争の影響が大きくなっていった。

当時は日中戦争のさなかにあり、同校の授業科目には解剖学や生理学といった獣医学に関連するものだけでなく「修身及国史（実践道徳・倫理学・国史）」や「体操（学校教練）」が組み込まれていた。1941 年に太平洋戦争が勃発すると、大学や専門学校の修業年限を短縮する法律が交付され、学徒動員の影響もあり授業時間の確保が困難となった。1944 年には戦局の悪化に伴い学校教育の統制が一段と強くなり、第 2 代校長の渡辺中は国からの指示に対応すべく、家畜の増産や戦陣獣医教育を優先し平時の基礎研究などはしばらく割愛するように、といった方針を教職員に伝えたとされている。また、獣医学教育の現場では食料の自給や獣医の職責が重視され、畜産学教育を強化する国の方針により、獣医学科が獣医と畜産を一体とする獣医畜産学科に改められていった。教育内容を改変した証拠として校名の変更も求められ、本学は 1945 年 1 月に「日本獣医畜産専門学校」へと改称している。しかし、同年 3 月には政府より全学校での授業停止の指示があり、日本獣医畜産専門学校としての教育をほとんど行えない状況で、本学は終戦を迎えた。

終戦後、国内の学制が刷新され、専門学校は大学に昇格するものと高等学校に降格するものとに分けられる事になった。本学は大学への昇格を目指すこととし、1949 年 2 月の文部省の認可を経て、同年 4 月に獣医畜産学部に獣医学科と畜産学科を置く「日本獣医畜産大学」が誕生した。その後、教育内容の充実・拡大を踏まえ、2006 年に現在の校名である「日本獣医生命科学大学」となった本学であるが、獣医畜産大学時代の畜産学科は、応用生命科学部動物科学科として現在も残っている。現在の動物科学科では動物と人との関わりに関連した幅広い領域を対象とした教育・研究が行われており、戦時中・終戦直後の畜産学科と同一視することはできないが、その成立の背景に戦争の影響があったことは本学の歴史の一つであり、博物館として継承すべきであると考えている。

■ 当館における戦争資料の取り扱い：展望と課題

戦争にまつわる資料として、現在「獣医极（じゅういきゅう）」の資料整理を進めている。獣医极（獣医行李とも呼ぶ）は陸軍の獣医官が戦地に出征する際に携行したもので、大型のトランクのような入れ物に馬の治療に必要な機材や薬品が収められている。本学同窓会から当館へ、2 組 4 点の獣医行李の寄贈が予定されており、年度内に実施予定の企画展にて公開することを計画している。

学内の倉庫から発見された獣医极

本号のテーマは「戦後 80 年・地域とあゆむ博物館」であるが、地域と本学の繋がりを示す資料の収集については不十分であると言わざるを得ない。獣医行李を含め、現在当館が把握している大学史資料の殆どが学内にて保管されていたものであり、地域の中で本学がどのような役目を果たしていたのかは把握できていないのが現状である。今後は三博協加盟館の皆様のご協力を仰ぎながら、資料の収集・整理を進めていきたいと考えている。

※設置者については諸説あり、資料によっては山本忠一郎を含む 10 名が学校設置に携わったとしている

小平市鈴木遺跡資料館と戦後 80 年

小平市鈴木遺跡資料館　中野　純

はじめに

小平市鈴木遺跡資料館は、鈴木遺跡で発掘された出土品を展示することを目的としている資料館です。鈴木遺跡は後期旧石器時代に 12 枚の文化層を形成するように長期にわたって人が生活しにきていた場所でした。縄文時代にも人の生活痕跡はみつかっていますが、集落は形成されていません。江戸時代に玉川上水が作られ、新田開発が行われたことから人が定住するようになりました。

鈴木遺跡の発見は、水車のまわし堀の痕跡を発見したことが大きなきっかけとなっていますが、この水車は黒船が来航してからの国際情勢の変化に備えて、火薬の製造に使われました。その結果製造中の事故で爆発したという水車です。幕末の動乱期に日米の戦争になっていたかもしれないという情勢の証拠の一つといえるかもしれません。

鈴木遺跡という旧石器時代を中心とした遺跡と 80 年前の戦争についての関わりと、今年度小平市役所で実施した展示について述べたいと思います。

鈴木遺跡から見つかった戦争関係出土品

日中戦争から太平洋戦争に至る間に、物資不足から統制陶器と呼ばれる陶器が作られるようになっています。統制陶器は発掘調査で見つかる例と、土蔵などに保存されていたものが市に寄贈される例があります。統制陶器については、現在は展示をおこなっていません。

鈴木遺跡にはほぼ中央部に経理排水とよばれていた水路跡が東西方向に存在しています。経理排水は、小平にあった陸軍経理学校の施設からの排水を流すための排水路で、鈴木遺跡の中央に近い部分を西から東へ流れ、最終的には石神井川によって削られた谷へと流れていきます。この排水路の一部は歩道となっており、鈴木遺跡を東西方向に安全に歩く際には良い道となっています。

小平市内は太平洋戦争末期には約 20%が軍用地となっていました。軍用地の境目には境界石を設置して、その範囲を占めていました。この境界石自体は、戦後になって土地の用途が変わっても境界が変わらない限りはその役割が変わらないため、そのまま使われていました。陸軍境界石のうち 1 本は、公園の整備のために移設されて、喜平町みどり公園に残されています。

公園内の陸軍境界石

市役所で行った戦争に関する展示

今年の 8 月には、小平市役所で戦争に関する展示を行っています。市役所内ということで、先に述べてきたような現物を展示した場合、展示品の安全確保が難しいことから、基本的にはパネル展示とし、陸軍境界石の実物大手作り再現模型の展示も行いました。

陸軍境界石の原寸大再現模型

陸軍境界石に限らず境界石は簡単に動かないようにするため、地中に埋められている部分の方が長いのですが、それを感覚的に理解してもらうためには、地中に埋まっているところを横から見てもらう必要があります。実物でほんの一部しか見えていない境界石を、再現模型だからこそ土の中の様子まで見せられないかと考えました。

今回の展示では市役所という元来展示のための施設ではない場所で、どのようにそれを示すかという課題がありました。今回は会議室で使われる机 2 台で再現模型を挟み天板を地面に見立てて、土に埋められた境界石の様子を示すことができたのではないかと思います。

おわりに

市役所での展示は、使う場所の制約から安全に展示できるものが限定されるなど、難しい側面があります。しかし、どうしても発生する待ち時間の間に見学される人がいることから、日常的に博物館や資料館などに足を運んでいただいている人たち以外の人に見学してもらうという良い機会になったのではないかと考えます。

一方でオープンスペースでの展示は、見学者の人数や感想をうまく集める方法を用意しなければ、展示を行った効果を調べることが出来ないということが課題となりました。

空襲から記録をまもり、継承する―東京府・東京市文書―

東京都公文書館史料編さん担当　伊藤陽平

はじめに

東京都公文書館が所蔵する東京府・東京市文書は、東京の歴史を研究する上で重要な史料になっている。令和７年（2025）５月 23 日から７月 15 日まで開催されたミニ企画展示「戦後 80 年　戦火を免れた文書群」では、東京府・東京市文書が東京都公文書館に継承される契機となったアジア・太平洋戦争期の文書疎開をとりあげ、東京都がいかに空襲から記録をまもり、戦後に継承したのかを紹介した。ここではその概要を報告したい。

文書整理―資源愛護から疎開へ―

昭和 12 年(1937)に日中戦争が起きると、国家総動員法の下、国内の物資と人員が戦争に投じられていった。「紙資源」と見なされた公文書も例外ではなく、昭和 13 年７月から「資源愛護」を唱えて不要文書や図書の整理が実施された。昭和 14 年には通常廃棄される約 5,700 冊に加えて、保存年限経過前の文書約 28,000 冊が廃棄され、約 65 トンが「リサイクル」されている。文書疎開開始前に廃棄された文書は約 60,000 冊にのぼる。

昭和 17 年４月１日には空襲に備えて「最重要文書」3,233 冊を選び、安全な場所へ疎開することが決定された。しかし、昭和 20 年３月から５月にかけてのいわゆる東京大空襲で都庁に爆弾が直撃し、完全に文書を防護することはできなかった。

文書整理の様子（東京都公文書館所蔵『東京市公報』昭和 13 年8月 20 日、公報件名番号：0043674）

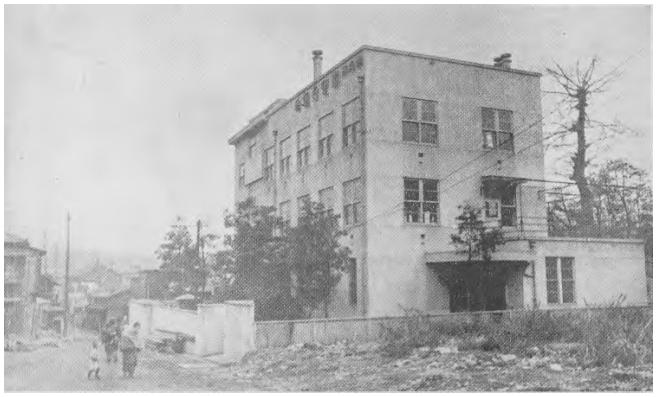
文書疎開と東京の大空襲

文書疎開には①局課や区の当時の現用文書、②文書課が保管した東京府・東京市時代の公文書などの非現用文書、③東京市史編纂室が歴史資料として保有した資料群の３系統が存在する。

まず、①について見ていきたい。都庁や区役所にあった現用文書の多くは焼失したものの、経済局は北多摩郡西府村（現府中市）に水道局は西多摩郡氷川村（現奥多摩町）に文書を疎開していた。展示では紹介しなかったが、この他に区役所の文書の一部も疎開され、戦後初期の段階では存在したようである。また、神田区の千桜国民学校にあった教育局の文書と芝区の愛宕国民学校にあった港湾局の文書は焼失を免れた。残念ながら、これらの文書のその後の管理状況はわからない。

②の非現用文書は四谷文庫（四谷区に存在した、教育研修所であった建物）と若木町文庫（渋谷区に存在した防衛局の資材倉庫）に疎開された。しかし、南多摩郡由木村（現八王子市）の玉菊造酒店の酒蔵への再疎開中に昭和 20 年３月の空襲で若木町文庫の文書が一部焼失した。

③の資料群は、東京市史編纂室があった京橋図書館から駒込六義園と埼玉県北埼玉郡騎西町（現加須市）の土蔵に疎開された。六義園には昭和 18 年中に市史編纂室の原稿や金地院文書、徳川家文書、法令類纂、撰要永久録、重宝録、寛永録などが運び込まれている。騎西町には東京都から引き継いだ明治期の東京府文書が疎開された。疎開に伴って文書課と市史編纂室が四谷文庫に移転して文書課四谷分室とも呼ばれるようになり、文書管理と史料編さんの２つの機能を兼ね備えることとなる。四谷分室を騎西町に移す計画もあったが、実行されていない。



四谷分室（東京都公文書館所蔵『東京市授産事業要覧　昭和 11 年 10 月』、請求番号：市刊G352）

文書復帰と文書整理

昭和 21 年（1946）年１月３日に GHQ から疎開文書の復帰が命じられた。局課、区役所、地方事務所などの①の文書群は、「公式保存所」に指定されたそれぞれの組織が保有する書庫に復帰された。他方、文書課と市史編纂室が疎開した②、③の資料群は、「中央保存所」に指定された四谷分室に移されている。四谷分室は交通局のバスを借用して約 20,000 点の資料をわずか 4 か月ほどで復帰させた。こうして東京府・東京市文書は、②と③の文書疎開によって空襲から守られ、四谷分室の後継組織である都政史料館、東京都公文書館に引き継がれた。

戦後、四谷分室では文書疎開の影響を受け、文書課が疎開した文書と市史編纂室が疎開した文書が別個に管理された。同じ東京府・東京市で作成された文書群が、管理主体も方針も異なる２つの系統に分けられたのである。一元的管理の実現は東京都公文書館の設立まで待たねばならない。東京府・東京市文書の事例は資料所蔵機関が下した選択の一つ一つが、資史料を含む「記憶」の継承に多大な影響を与えることを教えてくれる。

中央大学創立 140 周年と戦後 80 年

中央大学大学史資料館　北村厚介

はじめに

中央大学は 2025 年に創立 140 周年を迎えました。創立 140 年にあたり、大学史資料館では第 2 回企画展「中央大学創立 140 周年記念展示　140 年のあゆみ」を開催し、140 年史『中央大学 140 年のあゆみ　1885-2025』を刊行しました。それぞれの中で、中央大学と戦争を取り上げています。

あわせて隣接館である法と正義の資料館においては、第 2 回企画展「森重昭と被爆米兵調査　戦争が終わるということ」を開催しています。

1. 第 2 回企画展示「中央大学創立 140 周年記念展示　140 年のあゆみ」

中央大学は 1885 年の英吉利法律学校創立から始まり、経済、商、理工（工）、文、総合政策、国際経営、国際情報といった学部、ロースクールやビジネススクールといった専門職大学院、戦後直後の通信教育部の開設と、時代や社会の要請に応えて学部・大学院・専門職大学院等を充実させてきました。

本展示は、これまでの中央大学の歴史を振り返るとともに、これからの本学を展望する構成となっています。第 1 章では、現在の駿河台キャンパスの来歴、図書館の歴史と変遷、2015 年からの中長期事業計画「Chuo Vision 2025」を紹介しています。第 2 章では、8 つの学部と 2 つの専門職大学院、そして通信教育課程について、開設から現在の動向までを紹介しています。第 3 章では、『中央大学百年史』編さんを契機に設置された大学史編纂課時代以来の大学史資料館が所蔵する資料を、過去から現在に至るテーマを設定して展示しています。第 4 章では、これまでの年史編さんを振り返り、2025 年 12 月に刊行された 140 年史を紹介しています。

このうち、第 3 章において、当館が所蔵する戦争関係の資料を展示いたしました。大学と戦争について、大学が定めた「戦時学生自戒五條」、報国隊の腕章、1943 年に本学の学生が参加した北海道援農について、資料を基に振り返りました。

これらの展示は、多くの方にご覧いただけるよう、インターネットでも公開されています。

企画展チラシとインターネット展の二次元バーコード

2. 創立 140 年史『中央大学 140 年のあゆみ　1885-2025』

中央大学創立 140 年史は、記念展示と合わせて『中央大学 140 年のあゆみ　1885-2025』と名付けられました。

全 3 部 22 章構成で、創立から現在までの本学 140 年の歴史が、各学部や附属校、資料館事務室の教職員などによって執筆されています。

第 1 部「英吉利法律学校の展開」では、1885 年の創立から戦時体制下までを検討しています。第 2 部「旧制大学から新制大学へ」では、1945 年の敗戦から 20 世紀までを検討しています。第 3 部「中央大学の現在と未来」では、21 世紀以降の本学の動向を検討しています。

第 1 部「英吉利法律学校の展開」では、中央大学と戦争について、戦時体制への移行から「学徒出陣」に至る本学の動向について詳しく検討しています。特に、軍事教練や滝川事件の発端となる演説会など、戦時体制下に移行する本学の状況が整理されています。

『中央大学 140 年のあゆみ　1885-2025』

3. 法と正義の資料館第 2 回企画展示「森重昭と被爆米兵調査　戦争が終わるということ」

隣接館である法と正義の資料館では、第 2 回企画展「森重昭と被爆米兵調査　戦争が終わるということ」を開催し、2016 年にオバマ大統領が現職の大統領として初めて広島を訪問した際、被爆者代表として抱擁を交わした中央大学出身者の森重昭氏とその活動に焦点をあてています。

森氏は広島への原爆投下に遭った被爆者でありながら、日本軍の捕虜として広島で被爆したアメリカ軍兵士の調査に従事し、被爆米兵の遺族に対して、自身の調査の内容を手紙で伝えるという活動を行ってきました。

こうした森氏の活動から、戦後 80 年を迎える今、改めて「戦争が終わるということ」について考えようとしています。

おわりに

戦後 80 年の 2025 年は、中央大学創立 140 周年とも重なり、第 2 回企画展、創立 140 年史、隣接館における企画展などにおいて、戦争について取り上げました。今後も戦争と大学について、現役の学生や地域の方々とともに考えていきます。

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町 1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺・西武園線「東村山駅」西口下車徒歩 8 分
府中市郷土の森博物館	府中市南町 6-32	042-368-7921	京王線・JR 南武線「分倍河原駅」から京王バス「郷土の森総合体育館」行き、「郷土の森正門前」下車すぐ
町田市民文学館ことばらんど	町田市原町田 4-16-17	042-739-3420	小田急線「町田駅」東口から徒歩 12 分／ JR 横浜線「町田駅」ターミナル口から徒歩 8 分
町田市立自由民権資料館	町田市野津田町 897	042-734-4508	小田急「鶴川駅」6 番バス乗り場から「野津田車庫」行きまたは本町田経由「町田駅」行きで「綾部入口」下車／小田急線・ＪＲ横浜線「町田駅」21 番乗り場から本町田経由「野津田車庫」行きまたは「鶴川駅」行きで「袋橋」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町 1-684	0428-23-6859	JR 青梅線「青梅駅」下車徒歩 15 分
調布市郷土博物館	調布市小島町 3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩 4 分
瑞穂町郷土資料館 けやき館	瑞穂町大字駒形富士山 316-5	042-568-0634	JR 八高線「箱根ケ崎駅」下車徒歩 20 分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原 5	0428-86-2731	JR 青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市大字熊川 850-1	042-530-1120	JR 青梅線「牛浜駅」東口から徒歩 7 分
武蔵村山市立歴史民俗資料館 武蔵村山市立歴史民俗資料館分館	武蔵村山市本町 5-21-1 武蔵村山市大南 3-5-7	042-560-6620 042-566-3977	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス「かたくりの湯」下車徒歩 1 分 分館：西武拝島線・多摩モノレール「玉川上水駅」から武蔵村山市内循環バス「大南三丁目」下車徒歩 3 分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市 920-1	042-596-4069	JR 五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩 17 分
羽村市郷土博物館	羽村市羽 741	042-558-2561	JR 青梅線「羽村駅」西口から徒歩 20 分／ JR 青梅線「羽村駅」東口からコミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸 2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口から徒歩 10 分／西武池袋線「清瀬駅」北口バス乗り場 1 番から西武バス「郷土博物館入口」下車徒歩 1 分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町 3-12-34	042-525-0860	JR 中央線「立川駅」南口から「新道福島」行き・「富士見町操車場」行きバス「団地西」下車徒歩 5分／ JR 中央線「立川駅」南口から「立川駅北口」行きバス「農業試験場前」下車徒歩 5 分／ JR青梅線「西立川駅」下車徒歩 20 分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村 3221	042-598-0880	JR 五日市線「武蔵五日市駅」から「藤倉」行きバス「郷土資料館」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保 550	042-592-0981	多摩モノレール・京王線「高幡不動駅」から「百草団地」方面バス「高幡台団地」下車徒歩 5 分／多摩モノレール「程久保」下車徒歩 7 分
日野市立新選組のふるさと歴史館	日野市神明 4-16-1	042-583-5100	JR 中央線「日野駅」から京王バス「高幡不動駅」行き「日野七小入口」下車徒歩 5 分／京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から京王バス日野駅行き「日野七小入口」下車徒歩 5 分
小金井市文化財センター	小金井市緑町 3-2-37	042-383-1198	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口もしくは「東小金井駅」からココバス北東部循環⑬「小金井公園入口」下車徒歩 5 分
くにたち郷土文化館	国立市谷保 6231	042-576-0211	JR 南武線「矢川駅」下車徒歩 10 分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋 1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス「イオンモール」行きで「八幡神社」または都営バス「青梅車庫」行きで「八幡神社前」下車徒歩 2 分
パルテノン多摩ミュージアム	多摩市落合 2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5 分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町 2-24-16	042-388-7163	JR 中央線「東小金井駅」南口から徒歩 9 分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町 3-7-1	042-388-3300	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口バス 2 番 3 番停留所からバス「小金井公園西口」下車徒歩5 分／西武新宿線「花小金井駅」南口より徒歩 5 分「南花小金井」（小金井街道沿い）停留所から「武蔵小金井駅」行きバス「小金井公園西口」下車徒歩 5 分
たましん歴史・美術館（休館中）	国立市中 1-9-52	042-574-1360	たましん歴史・美術館：JR 中央線「国立駅」南口前／たましん美術館：JR 中央線「立川駅」北口より徒歩約 6 分
東京都立埋蔵文化財調査センター	多摩市落合 1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5 ～ 7 分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町 5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口から徒歩 18 分／西武新宿線「花小金井駅」、「田無駅」からはなバス第 4 北ルート「多摩六都科学館」下車すぐ
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町 4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から西武バス「久米川駅北口行」で約 10 分／西武新宿線「久米川駅」北口から西武バス「清瀬駅南口行」で約 20 分（いずれも「ハンセン病資料館」で下車）
コニカミノルタ サイエンスドーム （八王子市こども科学館）	八王子市大横町 9-13	042-624-3311	JR 中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「みつい台」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩 2 分
桑都日本遺産センター 八王子博物館	八王子市子安町 4-7-1 （サザンスカイタワー八王子３F）	042-622-8939	JR 中央線「八王子駅」南口から駅直結／京王線「京王八王子駅」から徒歩 8 分
東京都立大学 91 年館	八王子市南大沢 1-1	042-677-1111	京王相模原線「南大沢駅」下車徒歩約 5 分
狛江市立古民家園 （むいから民家園）	狛江市元和泉 2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」または「和泉多摩川駅」から徒歩 10 分／小田急線「狛江駅」北口から「多摩川住宅」行きバスまたは「こまバス」（北回り）で「児童公園」バス停前
武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	武蔵野市境 5-15-5	0422-53-1811	JR 中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」から徒歩 12 分／ JR 中央線「武蔵境駅」北口からムーバス境西循環に乗車し、4 番「武蔵野ふるさと歴史館」下車
帝京大学総合博物館	八王子市大塚 359	042-678-3675	多摩モノレール「大塚・帝京大学駅」下車徒歩 15 分／京王線「聖蹟桜ヶ丘駅」「高幡不動駅」「多摩センター駅」から京王バス「帝京大学構内」行きに乗車し終点にて下車
国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館	三鷹市大沢 3-10-2	0422-33-3340	JR 中央線「三鷹駅」南口または「武蔵境駅」南口から小田急バス「国際基督教大学」行きにて終点下車／武蔵境駅からタクシーで 10 分
日本獣医生命科学大学付属博物館	武蔵野市境南町 1-7-1	0422-31-4151	JR 中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」南口から徒歩 2 分
小平市鈴木遺跡資料館	小平市鈴木町 1-487-1	042-323-2233	西武新宿線「小平駅」南口から西武バス「武蔵小金井駅」行き、もしくは JR 中央線「武蔵小金井駅」から西武バス「小平駅南口」行き「回田本通り」下車徒歩 5 分／西武新宿線「花小金井駅」から立川バス「国分寺駅北口」行き「共済住宅」下車徒歩 10 分
東京都公文書館	国分寺市泉町2-2-21	042-313-8450	JR 中央線・武蔵野線「西国分寺駅」から徒歩8分／京王バス・寺85系統「いずみプラザ前」から徒歩4分／ぶんバス・万葉けやきルート、北町ルート、日吉町ルート「西国分寺駅東」から徒歩5分
中央大学大学史資料館	八王子市東中野742-1	042-674-2132	多摩モノレール「中央大学・明星大学駅」から徒歩約10分

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩　No. 47

発 行 日　2026 年 3 月 31 日

発　　行　東京都三多摩公立博物館協議会
2025 年度会長　東大和市立郷土博物館
東京都東大和市奈良橋 1-260-2
042-567-4800

編集委員　東村山ふるさと歴史館　松﨑 睦彦
府中市郷土の森博物館　草山 菜摘
青梅市郷土博物館　平野 玲菜
町田市立自由民権資料館　松崎 稔